

女神

Mit Deinen Gottesgaben macht man seine Umgebung zu
Verbrechern, ohne sich's traumen zu lassen.
—君みたいに天与の美貌に恵まれれば、夢にも思わないう
ちに、その取り巻き連中は罪を犯してしまうものさ。

Ich mich scheiden lassen! -
Lasst man sich scheiden, wenn die Menschen ineinander
hineingewachsen und der halbe Mensch mitgeht?
—別れることも……だと!
別れられるってのか? 二人の人間が互いに混ぜこぜに
なってるのに、半身だけ持つてくなんてことが?

オペラ「ルル」より

ベルリンは新しい街だ。少なくとも、少佐にはそのように思われる。そして落ちつかない街である。新しく、いつまでたっても未完成で、いつもどこかしらなにかを造ったり、変えたり、壊したりしている。古いものを一部に残しながら、うごめくように拡張を続けている。街じゅういたるところに見受けられる、若者たちによるわけのわからないアートとやら、どここの国から来たのか判別しかねる、さまざまな肌の者たち、立派な、巨大なガラス張りのビル、夜になれば煌々と明かりのともる街並み。

戦勝記念塔の展望台からは、ベルリンの夜の明かりがよく見渡せた。高さ六十メートル以上もあるこの塔は、ベルリンのテューアガルテン……動物公園なるだっ広い公園のど真ん中、園内を通り抜ける五本の通りが交差するロータリー部分に、いまはぼつんと立っている。塔の上には黄金に輝く勝利の女神ヴィクトリアが、その建設目的であるデンマーク戦争の勝利を記念して、いまだ誇り高くそびえている。

塔の中へ入り、長い螺旋階段を上ると、女神の足下の展望台へ出ることができる。フェンスをはりめぐらした円形の展望台はひとつがすれ違うのもやっとなほど狭いが、閉館時間も近づいた時刻には、誰もいなかった。

女神ヴィクトリアの足下で、晩秋のベルリンの夜を見下ろしながら、少佐はその街が放つ明るさに反発しようとしている自分に気がついた。塔からまっすぐに伸びた六月十七日通りのつきあたりにそびえるブランデンブルク門は、ここからではごく小さく見えるだけだが、あまりにも華々しくライトアップされているために、すぐにそれとわかる。通りを行く車のライト、ポツダム広場の明かり、天へ向かつてにゅつとつきだしたテレビ塔の放つ光、そうしたものが動物公園の、いまは葉を落とした静かな木々の群れの先にふいにあらわれ、がなりたてながらこちらへ迫ってくるような印象を与える。ベルリンの夜の明かりは、少佐をなにやら威嚇するような、もののしい気持ちにさせた。街じゅうが必死に明かりを放って、夜を、暗闇を、まがまがしいものを、不安を、重圧を、押し返そうと試みているかに見えた。

少佐ははりめぐらされたフェンスの隙間から、女神を見上げた。女神は泰然自若といった様子で、まっすぐにベルリンのはるか彼方を見返していた。磨かれ、よこれひとつ見えない女神は神々しいが、物憂い、動かぬ表情は、どこか痛々しいようにも思われた。女神は決して羽ばたかない。決して飛翔しない。ただこの場所で、このベルリンのど真ん中で、いつまでも黙って月桂樹の冠を掲げているだけだ。

塔の閉館時間になった。受付にいた男が息を切らしながら長

螺旋階段を上がってきて、少佐に抑揚のない声で、もう降りるように命じた。男は少佐が先に出ていくのをじっと待っていた。少佐は命令に従って、螺旋階段を下りていった。男は数歩離れてついてきた。少佐が塔を出ていくとき、男は自分の持ち場である受付の前で薄く笑って、

「お客さん、軍人さんでしょう。すぐわかります。わたしの父もそうでした、あなたとまったく同じ歩き方でした……」と云った。

少佐は外へ出た。記念塔はロータリーのご真ん中にあるので、どこかへ移動するためにはいったん地下道へ降りて、また地上へ上がらなければならない。少佐はすぐそばの階段を降り、地下道へ入っていった。誰もいなかった。足音が薄明かりに照らされた壁に当たり、大きく四隅で跳ね返って、少佐の耳に迫ってきた。四隅の暗がりには、あたかも少佐を引きずりこむ機会を淡々と狙っているかのように、少佐が動くたびに一緒になってうごめき、どこまでもついてきた。

「わたしの父もそうでした……」

少佐ははじめて父親につれられて、戦勝記念塔やブランデンブルク門を見学したときのことを思い出していた。父親は幼いクラウス少年に向かって、門の上の四頭馬車に乗った女神ヴィクトリアを差し、かつてナポレオンがベルリンを征服した際、女神がバリへ持ち去られたこと、そののちプロイセンが盛り返

し、ふたたび女神が戻ってきたこと、その一連の戦争に、エーベルバッハ家の偉大なるご先祖が参加したこと、などを語った。当時まだ執事見習いのいち使用人だったヒンケルも同行していて、しち小難しい家系図を朗々と語って聞かせた。

「まず、あなたさまのひい、ひい、ひいおじさまに当たる方からはじめなければなりません……」

ひい、ひい、ひい……それは遠い昔の響きだった。その昔から続くものが、いつまでも残ってたえられているというのは実に不思議だった。クラウス少年は、自分がこうした由緒ある、壮大な歴史と直結したなにかであることに、誇らしいような、不気味なような、名状しがたいものを覚えた。

その後彼らはバスに乗り、戦勝記念塔へ行って、話題はデンマーク戦争のことや普仏戦争のことに移った。エーベルバッハ家のご先祖は、この戦争にも名を連ねていた。幼いクラウス少年は、歴史が戦争ばかりで成り立っていることを感じ、歴代のご先祖と同じように、いづれ自分もそれに参加する義務が発生するに違いないと考えた。それはクラウス少年の少年らしい誇りを満足させ、自分の家柄に対する自信、自分の出自に対する確固たる自信を形づくるのに役立った。そしてなによりクラウス少年の印象に残ったのは、あまたある戦いの、その勝利を記念した女神の像だった。

「人生というのはな、まるまる戦争みたいなものだ」

歸りのバスの中で、クラウス少年の父親は云った。

「戦う対象が常に、ひっきりなしにあるんだ……そしてそれに、勝ち続けなければならん。もっとも、おまえはまだそんなことを考えなくてもいいがね」

戦うこと、そしてそれに勝つこと、という、人間にとつて一種不可避の衝動が、クラウス少年の中でたしかに意識されたのは、このときだったのかもしれない。戦争と勝利、そして勝利の女神の關係は、幼いクラウス少年になにか不思議な感銘を与えた。母親のいないクラウス少年にとつて、女性というものは親しみが持てるような、近寄りがたいような、いわく云いがたい存在だった。戦いに勝てば、美しい女神を得られるのだ、とクラウス少年は考えた。それは非常に魅力的なことに思われた。クラウス少年はその日から幾度か、美しい女神が地上に舞い降りてくる夢を見た。クラウス少年はたいへんな冒険を成し遂げるか、悪の敵を粉碎するかしたあとで、女神は彼の勇気をたたえ、その美しい笑みを向けるのだった。

少佐は暗く閉塞した地下道をぐり抜けて、六月十七日通りに出た。ライトをつけた車がひっきりなしに行き交う通りは明るく、少佐はまぶしかったので、しばし目を細めて明るさに慣れるために立ち止まっていた。それからこの大通りを例の、ひと目でわかるという軍人式歩行でつかつか歩いていった。

少佐は歩きたかった。ベルリンでは、少佐はいつもどこか身

体の隅が落ちつかなかった。ボンは小さな都市だ。ローマ帝国の時代にまでさかのぼる古い街は、すでにできあがり、とうの昔に成熟して、ひっそりと余生を送っているかに見える。そのような場所の、これまた古い家柄に育ち、根を張って生きている、そういう人間は、古く、安定し、もはや枯れかけているようなもののうちに、静かな安らぎと、豊かな憐憫のようなものを見出すのかも知れない。

ブランドンブルク門に到達した。門は四方からライトに照らされて、華々しく漆黒の中に浮かび上がっていた。その上に鎮座する四頭立て馬車に乗った女神ヴィクトリアは神々しく、威厳たつぷりに見えた。門の前のバリ広場は昼間のように明るく、まだ観光客がうろついていた。彼らを狙った露店や大道芸人も、数多く残って営業を続けていた。周囲にはしゃれた現代的な建物がいくつも建っていて、あの手この手で観光客たちを惑わす。それで、お客連中は門を見学し写真に収めると、せわしなくそういったものの中へ吸い寄せられていく。歴史的門の威厳はすではない。女神を信奉し祈りを捧げる者はどうの昔に死に絶えた。観光客たちにとつて重要なのは、見学の証拠に門を写真に収めること、その次にはきつと、あたりのレストランで飲むドイツのビールなのだ。

少佐は感傷的な気分だったのかもしれない。かつて力を持っていたもの、そして歴史の流れにもまれ、この世から駆逐され

消えてゆくものの静かな嘆きと足掻きが、胸にせまってくるようだった。名ばかりが広く知れ渡り、すっかり大衆化されて、いわば守られながら虐待されている歴史あるものたちと自分とは、どこか似ている。少佐はそういうものが、自分のうちにも流れているのを感じる。自分の名前にくつついた「yon」の三文字の重みを、少佐は感ずる。ひい、ひい、ひい、のつらなり。沈みゆく三文字。それがあることで、少佐はこれら過去の勝利を記念したものたちと、親しくする権利を有しているという気持ちになる。

少佐はブランドンブルク門上の女神に向かって、心から敬礼した。それから女神の下をくぐり抜け、さらに先へと歩いていった。明るい街並みに刃向かい、少佐は影を求めて建物に寄り添うように歩いた。ところどころにわだかまる影は優しく、明るさに疲れた彼を迎え入れた。少佐は影から影へと渡りながら、自分がつかの間休息しているのを感じた。少佐はいつしか微笑していた。勢いよく角を曲がるたび、愛用のトレンチコートの裾がくるりとひるがえり、それ自身、舗装された道に濃く黒い影を落とした。

ベルリンのグランドホテルも、少佐には嘆息しているように見える。ホテルはさまざまな客を抱えては吐き出す。かつては、見栄も重圧も義務もこたにしてごてごてと盛り立てた貴族たちを。いまでは、世界中の出自不明の観光客たちを。少佐は自分が建物の入り口に立ったとき、急激な歴史の推移を見つめてきた建物が、彼に向かってそつと同情のこもった微笑を浮かべたように思われた。

彼は清潔で近代的に作り替えられているホテルの胎内へ入った。エントランスホールは吹き抜けになっており、真正面に大階段が伸びている。階段には絨毯が敷かれ、着飾った大女優でも降りてくればそれだけで映画の印象的なワンシーンになるだろう。天井からは豪勢なシャンデリアがぶら下がっている。少佐の好みからすれば、これは大きすぎ、あたりを照らしすぎ、そして光りすぎである。おかげで、このホールにもまた影がちつとも見あたらない。隙間なく、くまなく光で照らされたロビー、完璧な微笑みを向けてくる受付の従業員。少佐は気持ちの底がざわついて、いらだちを覚えているのを感じる。なにもかもがあまりにあからさまでのつべりしていると感じる。

受付に立っていた、愛想のいい、やたらに白く美しい歯を持

った女性に声をかける。スイートルームに当たる部屋番号を伝え、宿泊者の名前を告げる。女性にはこやかに微笑み、確認のため、さつそく部屋に電話をかけた。少佐は彼女を見るときもなしに見ていた。歳のころはおそらく三千後半、魅力的な金髪、大きく薄い、淡いピンクの口元は、電話の応答を待つあいだにも笑みを絶やさないう。軽く首を傾け、ときおり灰色がかった青い目を受話器へ向けたり、手元へ向けたりしている。受話器を支える左手の薬指には結婚指輪、たぶん子どもはいないだろう。「エステンさまは、お部屋にいらつしやらないようです。外出するところはお見かけしていませんが……」

彼女は申し訳なさそうにそう云うと、首を伸ばして、エントランスを見やつた。すぐにそのあたりにいた従業員が気づいて、急いでやつてきた。

「エステンさまですか？ 今日はお出かけになつていないと思いますよ。ご夕食にもまだお見えになつていないはずです」

少佐はその対応の見事さに息苦しい気持ちが生じて、逃げ場を求めてロビーを見回した。

ちようどそのときだった。ロビーにひそかなざわめきが起こつた。ひとびとの視線をたどつて、少佐の目はエントランス正面の大階段に吸い寄せられた。

大階段を、実に優雅なしぐさで降りてくる者があつた。襟と袖に膨大な毛皮のついた、真っ黒なコートをゆるく身にまとい、

きつちりと巻き上げた金髪の上には羽飾りのついた黒の平たい帽子が乗っていて、そこから顔を覆うベールが垂れ下がっていた。耳には涙型のサファアアをはめこんだイヤリングが、そして首元には同じ宝石と真珠をあしらった三連のネックレスが、シャンデリアの光をともに受けてきらめいている。黒革の手袋をはめた手が手すりをゆつくりと、なめらかにすべり、同じく黒革のかかとのある靴が、階段を一段一段、確かめるようにじつくりと踏みしめて下ってくる。少佐はしばし見とれた。すばらしい光景だった。すばらしい服、すばらしい宝石、そしてすばらしい容姿、どれをとっても美しかった。こんな美しいのを、少佐はひとりしか知らなかったし、また、世界にふたりとないことも知っていた。

その人物は、自分が注目されていることを十分に理解しており、かつそれに慣れていた。あたりの視線をかき集めるのをさして気にも止めず、どこかしら愉快に感じている気配があった。ゆつくりとあわてずに階段を降り、優雅な足取りでロビーをつきつてエントランスへ向かう姿は堂々としていた。ロビーにいた恰幅のいい初老の男が、自分の前を通り過ぎていったその人物の背中を眺めながら、ため息とともに首を振った。それと境に、制止していた空気はふたたび動き出した。ポーターは荷物運びを、ロビーで雑談していたひとびとは会話を、どこかへ向かおうとしていたひとたちは自分の歩みを、それぞれ再開し

た。しかしなお、あたりの空気はまだ十分な衝撃と動揺を含んでいた。

その世にも美しい人物は、エントランスを抜けて外へ出ていくこうとしていたが、ふと受付のほうに目を留め、少佐の姿を見とめると、向きを変えてこちらへ歩いてきた。少佐の受け持ちをしていた受付嬢が、あわててカウンターから飛び出していた。

「グロリアさま、お出かけですか？　ちょうどよかった、こちらの方が、エステンさまにご用があるとかで、いまお電話したのですが、お部屋にいらつしやらないようで……」

「グロリアさま」は少佐から少し離れたところで立ち止まり、急ぎ寄ってきた受付嬢を微笑を浮かべて受け止めた。それから、ベールに覆われた顔をゆつくりと少佐へ向けた。目が合った。そのひとはひとつふたつまばたきをして、口もとを丁寧に引き上げ、微笑を浮かべた。柔らかな、美しい、それでいてどこからかうような微笑。お互いを見つめあうあいだ、少佐はまるで時間が止まっていたような気がした。

「どうもありがとう、エステンさんも一緒に出かけるところだったから、いま降りてくると思うけれど」

「グロリアさま」は、男とも女ともつかない不思議な声を出して、その受付嬢を視線で追い払った。それから少佐に向かって最後の数歩を歩いてきた。

いまやふたりは向かい合つて、ロビーの片隅に立つていた。

少佐は相手を上から下まで眺めた。耳と首にぶら下がったアクセサリーは、軽く二百年は前のものだ。宝飾品が、家名を背負い、その威信を背負い、途方もない手間暇をかけて、ごく一部のひとたちのために作られていた時代。そういう仰々しい時代のものをいまだに使いこなせる人間はそういうない。

「あ……」

と少佐は云つた。なにを云えば、そしてどう云えばいいのか、よくわからなかつた。今日はいつたいどつちのつもりで接したらいいのかもわからなかつた。男なのか？ 女のつもりなのか？ その格好からは女かと思われたが、少佐の知る「グローリア」なる人物はどつちつかずのまま通用する世にもまれな人物だつた。伯爵という称号をつけていないので女だろうか？ でも、ときどき彼が身分を捨ててとんでもないことをやらしたりするのを、少佐は知っている。

グローリア氏は、否、少佐のよく知つたグローリア伯爵は、少佐の不器用な滑り出しにくすくすと笑つた。その目はいたずらっぽく光つていた。そして口元は、なんとも神秘的に微笑していた。顔に垂れ下がったパールが、彼の表情を包み隠し、あやふやにし、ひどく艶っぽくしていた。

怒つちやいない。少佐はそう感じて、ひとまず安堵した。最後に彼に会つたのは、もう何ヶ月も前のことだつた。再会した

彼らのあいだには、ひどくひび割れた感じはなかつた。お互いに相手を穏やかに受け止めており、親密ささえ感じられた。しかしそこには確かにひと握りの硬さ、冷たさ、あるいはぎこちなさがまぎれこんでもいた。

「きみはわたしに用があるのじゃなくて、エステンさんに用なんだろう？　ここ最近、きみんとこの部下が何人か彼の周りをつろついていたのを知つてるよ。エステンさんもちろん知つてる。でも誰もなにも云わないので、彼はちよつとどうしたらいいのかわからないでいる。きみが出てきてよかつたよ。でないと、あのひとは変な心配をしだしかもしれないからね……」

彼の口調は、なんと打ち解けていて、なおかつよそよそしいことだらう。優しい声音があたかも少佐をその中へ引きこみそうになり、けれども寸でのところでつっぱねている。少佐は自分がもてあそばれているように感じる。グローリア伯爵はくせ者だ。ふたりのあいだに持ち上る微妙な感情の動きについて云えば、たしかにくせ者だ。右へ左へ、少佐を翻弄する。それで、少佐はなにが彼の本意なのか、よくわからなくなる。エーベルバッハ少佐は試されている。いとおしく、残酷に、試されている。

「来たくて来たんじゃない。部下にやらせようと思つとつた仕事だつたのに。おまえのせいだ。おまえがエステンじいさんと知り合いとは知らなかつた」

「意外だった？」

伯爵はまつげをはためかせて目をそらした。

「はいと云えばいいだし、いいえと云えばいいえだ。おまえのことなら、もうめったなことじゃ驚かんよ。でも部下はそうじゃないんでね……」

少佐は狼狽した部下どもに泣きつかれたときのことを思い出していた。はじめ、この任務は順調にいきそうに見えた。エステンとは故郷ザクセン州パウツェンで地味な老後を過ごしている、八十近い老人で、規則正しく静かな生活を送り、ひと柄はいたって温厚で、危険はなにもなかった。少佐に任務を任された部下DとEは、ただ彼を見張り、ある資料について交渉を持ちかけ、無事に受け取って、ボンへ戻りさえすればよかった。説得に多少の時間がかかるかもしれないが、それはあまり問題ではなかった。

雲行きが変わったのは、DとEが配置についた翌々日、エステンが突如気晴らしを思いつき、ベルリンへ向けて出発してからだだった。ふたりがあわててあとを追うと、エステンが宿を取ったグランドホテルで、なんと伯爵が待ち受けていた。DとEはひどく狼狽した。気晴らしはかまわない。誰にでもその自由はある。が、伯爵というのはいただけなかった。長年の経験で、少佐の部下たちは皆、伯爵が出てくるとんでもないことになる、とすっかり信じきっていた。秩序は乱れ、予測不能の事態

が起こり、うまくいくはずのことが見当違いの方向に飛んでいき、なにもかもめちやくちやになってしまふ。彼らはかわいそうなほどろたえ、即座に少佐に電話をしてきた。それで少佐は自分が出ていく羽目になったのだ。だが、ほんとうにそれしか方法がなかったのかどうか、少佐にはよくわからなかった。「伯爵」ということばを聞いた瞬間に、少佐は呼ばれているのではないかと思つたのだ。何ヶ月も声を聞かず、顔も見なかった伯爵に。

うわさのエステン氏がエレベーターを降りてきて、ロビーを横切つてのんびりと歩いてきた。背の低い、痩せた老人で、やや背中が丸くなつていたが、ぱりつとしたモーニングを着こなして、シルクハットをかぶつていた。丸い小さな眼鏡が、いわず云いがたい丸ぼつたい格好の鼻の上に乗つていて、それがこの一分の隙もない、金のかかった身なりの紳士に親しみやすさを加えていた。口ひげをたくわえた彼の顔は、その眼鏡に見合つた、素朴なものだった。

伯爵が黒い手袋に覆われた手を優雅に振つた。エステン氏はにこにこ笑いながらふたりの横へ到着した。

「エステンさん、ご存じでしょう？　こちらエーベルバッハ少佐。わたしたち、いま偶然にここで出会つたんです。あなたに用があるんですって」

エステン氏は、伯爵に導かれてその穏やかな顔を少佐へと向

けた。少佐は小さく一礼した。エステン氏は、眼鏡の奥の小さな灰色の目でじつと少佐を見つめながら、ああ、そうでしたかと云つて、少佐に手を差し出してきた。ふたりは短く握手をした。

「あなたの用向きがなにかはわかつているつもりですが」

エステン氏は身体や顔つきに見合った穏やかな、静かな声で云つた。

「でも、いまはいけませんな。わたしはこれから彼と夕食をとりに出ますから。ホテルにはもうしばらく滞在するつもりですから、後日あなたのために時間を設けることもできましようが、いまはだめです。わたしはこの都会での気晴らしを楽しもうと思つてゐるのだし、実際、これから彼と一緒に楽しむつもりですから」

エステン氏はそう云うと、伯爵をいとおしげに見やつて、丸眼鏡をつまんでちよつと持ち上げた。伯爵は微笑した。ふたりのあいだには、ふたりにしかわからないような特有の親密さが、たしかに認められた。少佐は承知したことを示すために、小さくうなずいて一步下がりを、給仕かなにかのように腕を持ち上げてエントランスを示した。エステン氏は満足したようにうなずいた。

「よい時間を」

少佐はエントランスの階段を降りてゆくエステン氏に向かつ

て云つた。エントランス前にはタクシーが待ちかまえていて、ドアマンが手助けをしようと控えていた。エステン氏はドアマンに助けられながら、のんびりとタクシーに乗りこんだ。伯爵は少佐に微笑を向けてから、彼のあとに続いた。

少佐はあたりに漂う伯爵の香水の香りが消えるまで、とつくに見えなくなつたタクシーのほうを見つめて、その場に立つていた。それからホテルの部屋をおさえるために、中へ入つていった。

「ああ、長期戦になりそうですね。あの男はそう簡単に要求には応じんでしょう。そのあいだは、ホテルで様子を見るとします。費用？ 予算？ これはこれは！ とても経験豊富な部長のことばとは思えませんな。おれがただぶらぶらするつもりだとも思つとるんですか？ 辛抱が肝心ですよ、部長。あなたの口ぐせでしょうが。その昔、たつたひとりのスパイのために十年待った男はどこへ行つたんです？ 盟友ミスター・Lが聞いたら泣きますぞ。スパイの美学に理解のない上層部を説得するのがあなたの腕でしょうに……ああ、エステン氏の滞在は予定じゃあと十日程度ということだから、まあそのへんが潮時じゃないですかね。十日くらいならAがなんとかするでしょう。動きがあれば報告しますよ。あんたは菓子でも食つて、いつもの

ようにどでんとかまえてりゃあいいんです。どうせどうなつてもおれの責任になるんですからな……」

少佐は受話器を放り投げた。それからシングルサイズのベッドに転がって、ひとり身というのはこういう場合たいそう具合が悪いと考えた。シングルルームの利用などというものは、このような豪華ホテルにとってプラスアルファ以外のなものでもないのだ。そのため、窓の外がすぐ隣の建物の壁だとか、もとは物置部屋だったとか、使用人の休憩室だったとか、そういう場所があてがわれる。そのかわり料金は格安だ。そういう部屋を選んでやったのだ。ありがたく思えくそつたれ……少佐は部長に毒づいた。少佐の部屋は一階の隅だった。こんなところに部屋があるのかというような、階段脇の廊下をずつと歩いていったところにあった。狭苦しい細長い空間にベッドと小さなテーブルがごろうじて置かれている。日当たりはすこぶるよろしくない。これに比べるとエステン氏だのグローリア伯爵だのの部屋は、最上階で、日当たりよく、広々として、リビングと寝室が分かれ、バスタブとシャワーが別で、小さなキッチンやバーカウンターなどもついているに違いない。おれだつてそういう部屋くらい、借りようと思えば借りられるんだ。少佐は考えた。そういう部屋へ来ると、自分が盗聴機を探しているあいだに、伯爵はまず……………

少佐は考えるのをやめた。この方向は不毛にすぎた。彼は起

き上がり、シャワーを浴びた。初日にしてもう、少佐は我が家の風呂がなつかしかった。あの大きなバスタブ、執事が用意する上質なタオルとアメニティ、壁のタイルの云いようなない古めかしい静けさ、どんなホテルのバスルームよりも、少佐は自分の城の風呂場を愛していた。今度そこへ、伯爵を連れてこようと思っていた。いつか、もう少しあと、しかしそう遠くない日に。ところがいま、ふたりのあいだは少しばかりぎくしゃくしていた。ぎくしゃくしているというより、改革を迫られていた。

それは伯爵が投げかけた、きわどい試みであつた。否、おそらく試みというより、彼の誠意にはかならないのかもしれない。少佐は、伯爵の美しさと神秘的な側面に、ほとほと惚れこんでいた。伯爵は公に見せるやや軽薄そうな言動と裏腹に、その内側は深く広く、静かに波立っている人間だった。彼の奥深くには澄んだ静けさのようなものがあつて、少佐はその深い森の奥にある湖のような場所へ出向いて、湖面に降り立ち、水浴びをし、ゆったりと羽を伸ばすのだった。少佐はその場所で、確かに伯爵をつかまえていた。また、その場所ですらえられてもいた。少佐はそこへ引き寄せられ、飲みこまれ、包まれ、漂い……………

しかし伯爵はあえてその湖の静かな場所から、自分の華々しい側面へ、少佐を引きずつていった。イギリスの名門貴族たる

グローリア伯爵、教養があり、背負うものを背負い、旧弊な、もはや減びゆく定めにあるものの顔から、彼のもうひとつの怪盗という顔へ。彼の周りにひしめく得体の知れない男たち、バトロンとも云うべきあまたの男たち、彼を溺愛し、あるいは崇拜する、彼の取り巻きたち。そこでは伯爵は、大物怪盗の名にふさわしく、ごてごてと着飾り、全身に愛と崇拜を受け、誘うように微笑し、薄暗い暗闇の中に咲き誇る花でありつづけている。

少佐はたぶん、そのふたつのもののあいだで混乱していたのだ。美しく静かな湖のすぐ横に大都市のネオンがきらめいているような光景に、戸惑わない人間などいるだろうか？ 少佐は確かに困惑していた。伯爵を知れば知るほど、湖とネオンの対蹠はなほだしいものとなり、少佐の困惑は深まった。そのふたつはいつこう融合の気配を見せなかった。双方が少佐の腕を片方ずつ取り、自分のほうへ引つ張ろうとしているようだった。湖を愛していることは確かだった。そしてネオンに惹かれて、いることも確かだった。しかしネオンの退廃的な魅力が必然的に引き連れてくるものは、少佐を困惑させ、激怒させる性質のものだった。

「ああそうだ、おれは至極平凡な男なんだ。古くさくて、堅苦しくて、やりきれない類の男なんだ、ちくしよ」

最後の喧嘩のとき、少佐は伯爵にそう云った。ふたりはア

ムステルダムのあるお屋敷の一室で向かい合っていた。部屋は好き放題に散らかっていた。テーブルの上にはワインやシャンパンやコニャックの瓶、グラス、つまみの載った皿などがごたごたと置かれており、トランプが模様のように撒き散らされ、部屋じゅうにプレゼントの箱の残骸とその中身が積み上げられていた。ソファの背もたれにはとんでもなく豪華な毛皮がかかっている、暖炉の炉棚の上には、誰かが箱から出されたばかりの指輪やブレスレットやイヤリングを、大きき順に見本のようにならべていた。あたりにはまだ紫煙が生々しく漂っており、酒と男ものの香水が交じり合った匂いが充満していた。部屋はまるで嬌態をさらしているようだった。どこもかしこも、少佐には実に淫らに見えた。酒を飲み、煙草を吸い、伯爵を囲んでいたたくさんの男たち、その中心で笑う伯爵。

伯爵は窓枠に腰を下ろして、深い青のガウンをまとい、少佐をじっと見つめていた。開いている窓から、駐車場に止めていた車が次々にエンジンをかけ、出ていく音が聞こえていた。

「……意外に聞こえるかもしれないけど」

伯爵は手にしていた小さなシェリーグラスを窓枠に置いた。

「きみの云うことはわかる」

少佐は彼をきつく見返していた。完全に頭に血が上っていた。

「わかる？」

少佐は押し殺した声で云った。

「なにがわかるんだ？ なにもわかつとらんじゃないか。おまえはおれつてもんがいようがいまいがおかまいなしに、あちこちで気色の悪い男どもに囲まれて、もてはやされとるんだ。おまえの頭の中じゃそれは普通のことなのかもしれんが、おれには普通じゃない。おれはたとえそれまでの習慣がどうでも、誰か惚れた相手ができたなら、ほかはきれいさっぱりあきらめる。それが誠実な態度つてもんじゃないか？ おれは間違つとるのかね？ あるいは、こいつはおまえには通じない話なのか？ だとしたら、おれはおまえを誤解しとつたことになる。まあさうだな、惚れるなんてたいていは誤解そのものだ。そりゃわかつとる。わかつちやいたが……」

少佐は自分がみつともなくしゃべりすぎていると感じた。彼は口を閉じた。情けなかった。腹の底から怒っていた。伯爵は相変わらずじっと少佐を見つけていた。その顔色から、感情はうかがえなかった。少佐は伯爵から目をそらした。自分が壮大なひとり芝居をしている気がしてきた。

「……この話は何回もしてきたが、これ以上云わせんでくれ。云つちやいかんことまで云いそうだ」

実際、少佐はもう限界だと感じていた。伯爵とは、この件で何度もやりあつてきた。彼と関係を持ったこの二年ほどのあいだに、幾度も衝突をくり返してきた。少佐の願望は、ごく普通の人間がそう願うように、ただ彼を自分のものとし、その確信

を常に感じていたいということだけだった。少佐にはそれが必要だった。ひっそりと閉じられたふたつのものの関係、その中へ没入していくこと、その中で外の喧噪を忘れること、それが少佐の希望だった。ところが伯爵は、いつこうそれを追求する気配を見せない。ほかのものを排除し、没入する気配を見せない。それが少佐には耐えがたかった。少佐はあらゆる手を尽くして、彼だけに没入しようと試みているというのに、伯爵はというと、なんの制約も受けずに自由にしているのだから。

伯爵が小さく息を吐いた。

「……きみの云いぶんはわかつたよ。というか、わかつているんだよ。たぶんきみが思う以上にわかつてると思う。その上で云わせてもらうけど、わたしはきわめてきみの理想に近いよ。そうは見えないのかな。見えない？ だとしたら、悲しいな！ 確かに、わたしはこんなパーティーはしよつちゅうだよ。よく招待を受けるからね。どこぞの高級娼婦みたいなものをもらつてばかり。宝石、服、美術品、土地家屋、ほかいろいろ。わたしはそういうものを素直に好意として受けている……もしも娼婦であることが、きみの中でそういうことなら……娼婦が誠実で貞節なものの対極にあるとして仮定しての話だね……それはあまりにも偏見に満ちていて極端な見方だと、わたしなら云うね……まあそれはいいでしょう。それで、きみがわたしを夜毎自分を売り歩いているのだと思うなら……わたしと、わた

しの周りのひとたちとの関係をそういうものだと思う、わたしがそれを心から了承しているのだと本気で思うなら」

伯爵の目が刹那、燃え立つように揺らめいた。が、それはすぐに消えて、静かな、穏やかなものに戻った。そこには幾分か、あきらめのようなものも含まれていたかもしれないかった。

「わたしはきみとはやっていけない。愛しているけどね。きみは、愛は制限するものだと思うてる。わたしは、愛は拡張するものだと思うてる。困ったね」

伯爵は苦笑を浮かべた。

「接点は、見つかりそうもないな」

少佐はなにも云わなかった。もはやその部屋の空気に耐えられなかった。こんなところにいたら、自分が汚染されてしまう。

伯爵にはじめのころ感じていたあの嫌悪感に似たものが、ふたたび少佐の中に戻ってきて、じわじわと広がりはじめていた。やはり間違っていたのではないだろうか？ 伯爵の人格に惚れたと思いき、幻想を見ていただけなのでは？ 伯爵はやはり

どうしようもなく軽薄で、古来美しさが人間を翻弄し続けてきたように、他人をもてあそぶことを楽しんでいるだけなのだ：

：

少佐は部屋を出ていった。部屋じゅうにたちこめていた煙草と香水の匂いが、身体の中までしみついている気がした。いやな匂いだった。むせかえるように強烈で、しつこくて、少佐の

なにかを執拗にまさぐるうとしてくる。少佐は車に飛び乗り、ひと晩じゅうぶつ通しで車をとばした。眠気はなかった。疲れも出なかった。きみとはやっていけない、という伯爵のことが終始こだましていた。やっていけない。やっていけないだと？ それはこつちのせりふだ、ばかやろう。あんな男に惚れたのが間違いだった。正確には、惚れたのだと思いきんだのだ。幻惑されたのだ。すべては幻だったのだ。戻れ、エーベルバッツハ少佐、戻れ。日の当たる、まともな場所へ戻れ。もう金輪際、道を間違うものか。

……そして今日、久々に見た伯爵は、あんなにも美しかった。

あの姿は、注目を浴び、美しくきらめくあの姿は、実に伯爵らしかった。そして少佐は、彼を見た刹那、なにか誇らしい喜びを確かに感じたのだ。いったい自分がどうしたいのか、少佐はほとほとわからなくなっていた。疑いようのないことは、まだ彼を愛しているということだった。そして伯爵もまた。伯爵もまた、そうなのだ。

時刻は午後十時近くを指していた。少佐はベッドに横になると、もう一度受話器を取り上げた。

「ああ、おれだ、Aか？ いると思うとった。かけといてなんだが、この電話が終わったら、とつとと嫁さんのところへ帰れ。で、用件だが……伯爵は無関係だ。まったく、DもEも伯爵ひとりになををびびとるんだか。おおかた、あいつのとんでも

ない装いかなんかを見て、肝をつぶしたんだろうな。おれも見
た。クジャクの羽ばりに飾りたてとつた。例の資料は、時間を
かければエステンから穩便に受け取れるんじゃないかと思う。
まあ、あいつらもおれに泣きついて正解だったわけだ。という
わけで、しばらくおらんが頼む。あとは、とつと家に帰れ。
業務命令だ”

電話の向こうで、Aが苦笑したのがわかった。少佐もまた苦
笑し、それから早々とベッドにもぐりこんだ。

…彼を着ていたものは黒だった。眠りこむ直前、少佐はふ
とそう考えた。そしてあの、喪に服しているかのような、なに
かを堪え忍んでいるかのような、美しい顔にかかった黒のペー
ル。

エステン氏は老人らしく朝の早い人物であった。七時半にレストランへ行くと、彼はもう席についていて、ゆで卵の殻をむいているところだった。少佐は彼のとなりのテーブルにっこうとした。それを見とめたエステン氏は、にこやかに微笑んで少佐に挨拶を送り、自分の向かいに座るようすすめてきた。

「ホテルというのはすばらしい場所ですが、どうもベッドだけはなにやら落ちつかない感じがしますな」

のんびりと殻をむきながら、エステン氏は云った。

「わたしらの世代は、貧乏をした時代が長かったもんだから、よすぎるものはかえってよくないのかもしれない」

「あなたの部屋がどうか存じませんが、おれの部屋では、ノミのベッドでないだけかもしれません」

エステン氏は手を止め、それから丸眼鏡を片手でちよつと持ち上げて、遠慮がちに微笑した。

「失礼だが、少佐、あなたはどの部屋に泊まっておられるのです？ まさか、格安の質の悪い部屋じゃありませんまいな、使用人だつて逃げ出したくなるようなあの？ 昔から、あれはホテルの品位を汚すものだと思つてきましたが」

「そのまさかなんですよ」

運ばれてきた朝食のペーコンを切り分けながら少佐は顔をしかめた。

「一応これで仕事なものですから、宿泊費も経費というわけ。なんにしても雇われ人というのは、勝手なことはできませんですから」

エステン氏は同情と不満をこめたため息をもらした。

「そいつはいけない。失礼だが、あなたの方の経費をケチるようでは、NATOはおしまいですぞ。今度嚴重に抗議しましょう。悪いことは云わない、宿泊費なんぞわたしはどうにでもしますから、もう少しましな部屋にお移りなさい」

少佐は目の前の小柄な老人の、誠実そうなまなざしに一瞬引きつけられた。エステン氏はまぎれもなく、ひとに好意を持たれずにはおかぬ人物だった。彼が数十年の長きにわたつて、財界でなにをし、なにを成したかを、知る者は少ない。彼は、戦後の事態の收拾と経済復興のためにあらゆることをした。役職に就かず、表へ出ることはいつさいなしに、ひとり山のような仕事を一心にこなした。彼に比べれば、財務省大臣などはただの置き人形にすぎなかつた、というのが、当時を知る連中の見方だった。先を見通す能力に恵まれ、誰も考えつかないほど遠いところまで、早いうちに手を打つておこうとひとり奮闘していた。その恵まれた能力が悲劇を生んだのだ。彼の仕事は、周囲の人間にとって、しだいにわけのわからないものになつて

いった。理解しようにも、誰にも理解できなかった。というより、エステン氏は説明の努力を惜しまなかったが、誰も本氣にできなかったのだ。なぜ後進国などにかまける必要があるのか？ ほかの連中は、ただでさえ分断されてしまった国の中のことで手いっぱいだったのだ。

エステン氏はしだいに疎んじられ、婉曲なやり方で引退に追いこまれていった。彼は最後まで周囲を説得しようと努力したが、どうにもならなかった。エステン氏は静かに身を引いた。自分が関わっていた仕事のいっさいの情報を抱えて、故郷バウツェンに帰っていった。そしていまに至るまで、誰も彼を氣にかけたことなどなかった。

いま、NATOには、彼の持つているある資料がどうしても必要だった。それは彼が現役のころ、ある人物とのあいだに取り交わした密約を記したものだ。相手は要人ではあったがいわゆる途上国の人物で、当時は誰も氣にもとめなかった。その国が新興国としてのし上がってきたいま、その密約は非常に重要な意味を帯びてきていた。資料の開示を求める正式な要求は、エステン氏によってきっぱりはねのけられた。かつての同僚も、閣僚級の人物も役には立たなかった。脅しもおもねりも効果がなかった。上層部は手を焼いて、すっかり途方に暮れてしまった。そして彼らは、困ったことがあるとひとまず各種情報機関に投げつける性質があった。話は回り回って部長のとき

ろへたどりつき、部長は話を少佐へ持ってきた。

「命じておいてなんだが、わしやあまり氣がすすまん……彼のことは、個人的なつきあいはないまでも割とよく知つてるんじゃが……まあだからこの件を引き受けたんだが……ああいうのを天才と云うんだろうよ。正当な評価をされないのが天才の天才たるゆえんだろうから、ある程度仕方がないこととはいえ、わしや同情を隠せない。無用者扱いしておいて、いまさら価値がわかったからもう一度利用させてくれというのは、いささか恥知らずにすぎんだろうか？」

というのが、部長のささやかな意見だった。

「そのところを、よく理解しておいてくれんか。わしはそれがわからん連中にこの件を任せたくなかった。どうするかは任せるが、わしが云ったことを忘れんでくれ……」

少佐はいま、小さな穏やかな老人と向かい合いながら、なぜはじめこの仕事を部下にやらせようとしたのだろうと考えて、おかしくなった。たぶん、彼らの腕を鍛えるために？ そのつもりだった。だが結局、部長の云ったことに配慮をするなら、部下どもにはまだ無理だろう。彼らが辛酸を嘗めていない、とは云わない。そうではないが、これはそうしたものとまた微妙に性質が異なっている。エステン氏の横に、偶然にもグローリア伯爵という得体の知れない男がくっついていて幸いだった。かつての陰の大物エステン氏よりも部下どもをおびえさせるら

しい、なにをするかわからない、予測不能のグロリア伯爵。少佐は自分がリラックスしはじめているのを感じた。伯爵との微妙な問題は置いておくとしても、このエステン氏となら、数日間、うまくやれそうだった。

「いや、ありがたい申し出だがそれはやめておきます。あなたはそういうつもりではないんでしょうが、そういう貸しを作ると、あとが面倒でしてな。おれはいつさいそういうものを作らん主義なんです」

エステン氏は気を悪くした様子もなく、微笑んで、また丸眼鏡を持ち上げ、丸っこい、含蓄に富んだ鼻の上におさめると、ようやくむき終わったゆで卵を食べはじめた。

朝食の席では、少佐の目的のこと、つまり資料のことや、おそらくまだ夢の中に達しない伯爵のことはいつさい話題にのぼらなかった。彼らは世間話をし、時事問題について意見を交換しあった。エステン氏は別れぎわ、実に親しげに、まるで息子が孫にでもするかのように少佐の腕を叩いて、レストランを出ていった。

午前中は静かにすぎえていった。少佐はホテル内のサロンへ出て、テーブルのひとつに陣取り、各種の新聞を読んですごした。それから、ぶらぶらとホテルを出て、真っ昼間のブラン

デンブルク門に、その上の女神に挨拶しに行った。

いまにもひと雨やっつきそうな曇天の下で、青銅色の女神は今日も勝利に向かって馬車を走らせていた。雨が降らないといいが、と少佐は思った……このような誇り高い女神が、雨にぐしょぐしょにやられてしまうという光景は、想像しただけでもあまり愉快なものではない。もつとも、女神のほうはそんなことなど気にしないのかもしれないが。

パリ広場は今日も賑わっていた。いったい毎日毎日、どこからこんなに人間が湧いてくるのだろうか？ 世界中の観光客がやっ来て来尽くしてしまうということは、いったい起きないのだろうか？ 考えごとをする少佐の横を、女子学生の集団が通り過ぎていった。そうして門の前で記念撮影にとりかかった。少佐は彼女たちの横をふたび通りすぎて、広場から門の外へ出ていこうとして、英語で呼び止められた。集合写真の撮影を頼まれたのだった。少佐は断る理由がなかったので引き受けた。それに若い女と触れ合うのもたまにはよろしい。中年の男の中には、しきりに若い女と接触したがるのがあるが、少佐はあれはいかなものかと思うのだ。若い女性というものは、自分ももう若くない場合には折々の目の保養にするべきであって、それ以上の関係を取り結ぼうとするのは浅ましい。ひとは誰しも、自分に似合いのものを選ばなければならない……しかし、若い女性自体は悪くない、決して！

少佐は群れのリーダーらしい赤い縮れ毛の、そばかすだらけの女子学生にカメラを返し、若々しい集団と別れた。すさまじいアメリカ英語であれこれ云いあつていた女子学生たちの会話を背中であきかじつたところによると、少佐は「ちよつと近寄りたいたいがハンサム」であるとの由。ソーかね、と少佐は思った。悪い気はしなかった。

ベルリンの街をあてもなくぶらつきながら、少佐は自身も休暇に來たかのように感じはじめていた。先日まで、彼はある任務に追いまくられていた。ボンを離れてあちこちを飛び回り、部下を怒鳴りつけ、走り回つた。疲れきつて帰還する少佐を、ボンの街はいつも静かに、やさしく迎え入れるのだった。その静けさどこか沈んだような一抹のわびしさは、少佐を安らかな気持ちにした。ところがここは、大都市ベルリンの中心地だった。騒々しく、やや均衡を欠いた、なにか予測不能のもの。その中心地にいることの中には、倦怠と、それから興奮を呼び覚ますものも、確かにまぎれていないだろうか？ 少佐は昨夜抱いた感想との差に驚いていた。昼と夜では、こんなにも人間の感情は違ってくるものなのか？ 少佐は知らず微笑していた。こんなふうに陽気な気持ちになつたのは、久々のことであるような気がした。

少佐はぶらぶらと散歩を楽しんだ。そろそろ帰路につこうかと考えていたところで、雨が降つてきた。少佐はあわてて近く

の店の軒下に逃げこんだ。

そこは骨董品を扱う店であるらしかった。きれいに磨かれた飾り窓に自然目が止まつた。ビロードの布の上に、ダイヤモンドのティアラが飾られていた。中央に大きな花びらがあり、それを取り囲むように、月桂樹の葉のモチーフが並んでいる。繊細な銀細工のふちどりの上に、これでもかとはかりにダイヤモンドがちりばめられていた。十八世紀の作、参考商品、売り物ではない。

……少佐は無意識に、この世にも豪勢なティアラをいたたいた伯爵の姿を思い描こうとしていた。まばゆく輝き、全身から光を放っているかのような生き生きとした伯爵の姿を。しかし、浮かんでくる姿は昨夜の漆黒に包まれた伯爵、豪奢だが、秘密と重たさと憂いを秘めた、パールで美しい顔を覆つた伯爵だった。

午後遅く、ホテルへ戻つた。ちよつと一杯ひっかける気になつて、少佐はバーへ入つていった。カウンターに陣取ると、落ちついた革張りの椅子が、少佐を受け止めた。コニャックを小さなグラスに一杯。少佐は煙草を取り出して火をつけた。

カウンターの中では、年輩のバーテンダーが熱心にグラスを磨いていた。まだ客はあまり多くなく、彼はそれほど忙しくな

さそうだった。彼の慣れた手つきは、どこか執事のヒンケルを思い起こさせた。手慣れた仕事は、ひとつの明るい芸となって、素朴に純粹にひとを楽しませる。執事の銀器を磨く手つきも実に年季が入っていて、見事だった。彼はたぶん、主人が何日家を空けていても、決してだらけることなく仕事をするだろう。

少佐は目を細め、ぼんやりした。伯爵の昨夜の姿がちらついて離れなかった。彼はなぜ、なにも云わなかったのか？ 怒った様子もなく、失望したような様子もなく、喜ぶようなそぶりもなく。少佐はなにか、伯爵からの合図がほしかった。あんな別れ方をしたが、自分がおしまいにする気はこれっぽっちもないことに、少佐は気がついていった。少佐は前へ進みたかった。なにかこの硬直した状態を立て直し、ふたたび出直すきっかけがほしかった。

ふいに少佐の横に、ずっと誰かがすべりこんできた。少佐はやや驚いて、あわててぼんやりを追い払った。猫のように音もなく気配もなくやってきて、伯爵はそこに座っていた。彼は金糸で刺繍が施された、袖なしの黒いチャイナドレスのような服を着て、毛皮のショールを羽織っていた。首からは真珠の長いネックレスがぶら下がり、髪の毛は、頭のやや右下でゆつたりと大きなシニヨンにまとめてあった。そして黒い花と羽飾りがついたノーズベールを頭からかぶっていた。

伯爵はシャンパンを頼んだがり、しばらく口を利かなかった。

少佐もまた黙りこくっていた。やがて、伯爵はゆっくりと首をひねって、黒いベール越しに少佐を見つめてきた。青い冴え冴えとした目は意志の強さを感じさせたが、まばたきのたびに、まつ毛がどこか不安げに揺れた。

少佐は立ち上がり、伯爵の背中に手を添えて促した。伯爵はゆっくりと席を立て、ショールの具合を少し直し、彼に従った。

ふたりはバーの隅のテーブルへ移った。壁に沿ってしつらえられたソファに、彼らは並んで座った。伯爵はシャンパンをひと口飲んだ。少佐は彼をじつと見つめていた。

「きみに会えてうれしいよ」

伯爵はしばらくたってから、静かに首を少しだけ少佐のほうへ向けて、けれども目は伏せたまま、云った。少佐はうなずいた。

「エステンさんとの話し合いは、うまくいきそう？」

少佐は微笑し、「何日かかければな」と云った。

「でもそいつは、おまえに関係のないことだ」

少佐は静かに云った。

「そうだね」

伯爵はそつとうなずいた。

「おれとエステンとの取引だ」

少佐は云った。

「おまえは気にしないでよろしい」

伯爵はかすかに微笑んだ。そうして立ち上がった。少佐も立ち上がり、バーを出て、エレベーター前まで彼を見送った。徐々になつてくるエレベーターを待ちながら、少佐は横に立つ伯爵の香水の香りを、彼の身体を、それが確かにそこにあることを、感じていた。ものぐるおしい感情が、少佐を取り巻いていた。伯爵の顔半分にかぶせられた黒いベールは、なまめかしいけれども沈鬱な、胸をかきむしるような感じを与えていた。少佐はそれを剥ぎとつてしまいたかった。ベールを剥ぎとり、思いきり口づけたいような気がした。少し首を伸ばせば、そのうなじに口づけることもできた。腰に手を回して引き寄せることもできた。が、できなかった。彼のまばたきを見つめ、息づかいを感じることが、少佐に許されたことのすべてだった。

エレベーターが降りてきて、扉が開いた。伯爵は扉に手をかけ、中へ身体をすべりこませ、ゆっくりと振り返った。

「怒つてないか」

少佐は訊ねた。伯爵は首を振った。

「あきれてもいないかね」

伯爵は首を振った。

「……わかった。少し時間をくれ」

伯爵はかすかにだが、うれしそうに微笑んだ。その微笑をなめるように、静かにドアが閉まつた。

部屋へ戻ると、客室係が清掃をしていた。荷物はどこかへ運ばれたのか、部屋の中は空になっていた。

「こいつはどういうことだね？」

少佐は困惑し、怒りを覚えて客室係に詰め寄った。

「はい、あの、お部屋を移すようにとの指示がありましたので……。わたくしは指示を受けただけなので、わけを聞かれても困ります。わたくしはなにも知りません……お部屋の代金はもういただいてるそうです……」

客室係は目を白黒させて、しどろもどろに応じた。少佐はあつけにとられて、ベッドに座りこんでしまった。

「お部屋は十階の、角部屋でございます。今朝空きましたんで、最上階のひとつ下ではございますが、眺めは最高でございますし、お部屋もたいそう立派でございますよ……ここに比べたら、そりやもう、格段に」

客室係はなにか営業的なことのひとつも云わなければならなと思ったのか、そのようにべらべらとまくしたてた。少佐はまだあつけにとられていて、なにか考えるということができなかった。が、ふいに思いついて、客室係に訊ねた。

「その部屋のひとつ上に陣取つとるのは、もしかして、グローリアさんとやらじゃないか？」

客室係は目をぱちくりさせた。

「あのかたとお知り合いなんですか？ あのだいそう不思議な
かたと？ あのかたは、ホテルじゅうの話題をさらつてます
よ！ どんなひとなのかつてよく質問を受けるんですが、それ
が誰にもわからないんでしてねえ。エステンさまとは親しいお
知り合いらしいんですが、エステンさまもなにも教えてくださ
いせんからね……まさかご本人には訊けないですし」

少佐は答えなかった。少しして、彼が急に笑いだしたので、
客室係は驚いて飛び上がった。なにか不気味なものを見るよう
な目で少佐を見ていた客室係に、少佐はチップをはずんでやつ
た。客室係は、当然のことだが、とたんに顔をほころばせて、
「ありがとうございます、お客さま」と最大の敬意を見せて云
った。

三日目にもなると、エステン氏と少佐との朝食は、まるで長いあいだの習慣であつたかのような雰囲気を感じはじめていた。ふたりは相変わらず、伯爵のことも、少佐の目的のことも話題にせず、ドイツ経済のことや、国際情勢について意見を交換しあつた。経済については、短い会話の中から、少佐は実にいろいろなことを学んだ。

「経済の未来については、わたしは楽観的なほうです」

エステン氏は微笑を浮かべて云った。

「なんでも使い方次第だ。よい方向へ導かれれば、すばらしい結果を生みます。その反対なら、その反対に。われわれの歴史というものはおしなべてそうでしょう。最悪の状況を通して、われわれは学んでいるのです。経済というものは、まだほとんど幼児ですよ。なんとか自分の足で立つことを覚えたが、ひとりではなにひとつできない。これから長い長い時間をかけて、人類はこれに関する経験を重ねて、賢くなつていくでしょう」

それはひとりの人間の一生についても同じだった。そして、人生のあらゆる個々の側面についても同じだった。少佐はうなずいて同意を示した。

ふたりは朝食を終えてもなおしばらく話し合い、それから立

ち上がつて、一緒に新聞を読むために、ロビーの二階に設けられた、日当たりのいいサロンに向向いた。エステン氏はその場にいた従業員からドイツ経済新聞、ハンデルスブラットを受け取り、少佐は、木曜日だったのでディー・ツァイトを読むことにした。サロンにはほかに、くつろいだ格好の老人や、ビジネスマンらしきスーツを着た男などが散らばっていて、新聞を読んだり、考えことをしながら手帳になにか書きこんだりしていた。まだ朝早いために一階のロビーも静かで、ときおり紙をめくる音や咳払いが起きるほかは、物音もほとんどなかった。

ふたりは窓の左右に置かれた椅子に並んで腰を下ろした。そしてなかなか面白い時間を過ごした。エステン氏がなにかの記事に不満を表明して短い唸り声を上げると、少佐は首を伸ばしてその記事を読み、内容についてのエステン氏の講義を受けた。また、少佐が昨今の危機的な欧州情勢とアジア勢の台頭について眉をしかめながら記事を読んでいると、エステン氏がのぞきこんできて、わけを尋ねた。彼らはお互いに、政治に関してはやや保守的な意見の持ち主だった。細かな違いはあれど、意見を交わすたびに、彼らは意気投合した。

「まあ、少佐、あなたはもうとくにご存じでしょうが、わたしも旧家の出でしてな。生家はちょっとした古い家柄なのです。生家は兄が継ぎましたが、子どもに恵まれませんでした。兄はよかつた云つてますよ。子どもがいたとしても、土地家屋を

抱えたままではとてもこの先やっていけないだろうと。幸い生家は歴史的な価値も多少あるもんですから、兄が亡くなったあとは、市に寄贈することを考えてます。滅びゆく民ですよ、われわれはね。あなたもそうでしょう。われわれは古い体制に属するものを守ってきた人間だし、またそれを守り通す義務もある。民衆の望みというのは、すべてを平等にし、あからさまにすることにあらしいが……権利、平等……わたしたちは、なにを失ったのでしょうか。そして、なにを得たのでしょうか」

少佐は首を振った。失われ、滅びゆく者たち。消えてゆく家名。輝かしきかの「von Eberbach」も、たぶん消える。あと何十年か、あるいは、もしかすると何年かのうちに。そしてグロリアなる姓もまた、英国から消え去るだろう。そして静かに別れた。

午後遅く、少佐はAからの電話を受けた。

「なんだ、元気にやとるのかね? そうか。おれか? おれは順調に八十近いじいさんと休暇を過ごしとる。朝早く起きて、飯を食って新聞を読む日々だ。すっかり年寄りの気分だ。この調子じゃあ、いますぐ隠退生活にぶちこまれてもよさそうだ。伯爵か? おとなしいもんだぞ。じいさんのひまつぶしにつき

あつとるらしい……」

Aは笑って、伯爵の話題を流した。少佐は部下どもが自分と伯爵との関係をどこまで疑い、どこまで知っているのか、あえて気にしたことがなかった。部下たちのほうでも、そんな立ち入ったことを気にかけるようなそぶりは見せなかった。だが少なくともAは、なにかしら知っているに違いなかった。彼は忠実な部下であり、少佐自身よりも少佐のことを知っていた。彼は鋭く、そして思慮深かった。少佐は彼に自分を見抜かれることをなんとも思っていないかった。Aは少佐にとつて、もはや自分の影のようなものだった。

「BNDがエステン の件に首をつっこんでいるようです」

Aは世間話の延長のような、なんでもない口ぶりで云った。

「カーンのやつが、あなたを出しぬこうと躍起になっているみたいですよ。彼は、エステン の機密資料の保管先を探っています。うまくいくのかどうか知りませんが、ずいぶん人員を割いているようなので、お気をつけください……つて、むしろこれはエステン に伝えなければいけないことでしょうか」

Aはちよつと笑った。少佐も笑った。

「わかった。ほかになにか云うことはあるかね? そうか、まあおれがいないあいだ、せいぜい楽しくやってくれ。早く家に帰れよ」

少佐は受話器を置いた。ばかなやつめ、と少佐はBNDにい

る、自称少佐の好敵手、カーンに向かつて毒づいた。彼は少佐よりふたつ三つ年上の情報員で、少佐のように自分のチームを持つて活動することを許されていた。えらく尊大な、そびえるような鼻を持ち、大柄で、態度もそれにふさわしく偉ぶったものだったが、黄土色の短い毛に覆われた頭や顎を、なにかという神経質にかきむしった。少佐はそれを見るたびに、この男はなにか根本的に進む道を間違えているのではないだろうかという気がするのだった。確かに腕の立つ男だが、やり方が強引で、少佐を含め何人かの似たような地位にある人物に向かつては、競争心と敵意をむき出しにした。特に少佐には、なにか並ならぬ感情を抱いているらしく、ことあるごとに出し抜こうと必死になってかかってくるころがあった。つきあわされる部下がたまらないだろうと思うのだが、そういう男のところにはそれに見合った人種が集まるもので、上司に似て力ずくの、敵対心の強い扱いにくい連中がそれぞれの役割をこなしていた。

少佐はベッドに転がって、煙草を手にはばらくのあいだぼんやりと考えることをしていた。エステン氏の件は、成功必須だが焦って完了させるほどの案件ではない。エステン氏が資料の提出を渋るのは、当然の権利だし抗議だ。少佐はたった数日のつきあいだが、彼のがよくわかるような気がした。彼は古い人間だ。そして少佐もまた、古い考えの中にいる人間なのだ。少佐はベッドから起き上がり、受話器を手にとった。

「おれだ。おまえか、Z。元気に明るく仕事をしとるかね？　なんだその間の抜けた返事は。緊張が足りんぞ。Aにかわつてくれ……ああ、おれだ。いま手が空いとるやつはいるか？　カーンの動きを知りたい。逐一だ。あんな男にひっかかり回されるのはごめんだからな。今回の場合はな、資料を手に入れるのに必要なのは、時間と、老人に対するいたわりの態度つてやつだ。荒っぽい仕事じゃない。まあ、あの男にやわかるまいがね。ああ、そうだ、そうしてくれ。おれに仕事をとおつつけた腹いせだ、DとEをこき使つてやる。報告はおまえから頼む。それから、ふたりに伝えてくれ。特にDにだ。小競り合いなんぞ起こしたらただじゃおかんとな。面倒なことにはしたくないんでね」

Aはきびきびと指示に応じ、電話を切った。受話器を置いたあとも、奮闘していることだろう。少佐がいらないあだいだ、Aはチビ少佐と呼ばれ、まぎれもない少佐のかわりをつとめなければならぬのだ。それだものだから、チビ少佐はときおり責任感のあまりつい地が出て、周囲に母親めいた小言を並べ立ててしまうことがある。そうすると、まだ若いZは神妙に聞こうとし、DやEは笑いだし、Gは小声であんたにくどくど云われる筋合いはないわよ、と毒づき、Bなどは、

「わかったよ、お母さん！」

とたまりかねて大声で叫ぶのだった。そうすると、Aははつとし、あわててチビ少佐の仮面をつけなおしにかかり……

少佐は思い出してにやついた。少なくとも、いやにぎすぎすしたカーンとそのチームのあいだでは、こんなふざけたことなど起こりそうになかった。それとも、彼らは彼らなりに、なにか円滑なコミュニケーションなどというものはかっているのだろうか？

少佐はベッドに転がって、天井を見た。一階の最初の部屋に比べれば、この部屋ははるかに快適だった。やや狭いが居心地のいい調度品に囲まれた寝室と居間にバスルーム、日差しをたっぷり取りこんでくれる窓、座り心地のいいソファや椅子、少佐はそういうものに囲まれていると、自分が仕事でここへ来ているのだということを、うっかり忘れそうになった。ひとつ上の部屋に伯爵がいるという事実も、なにやら少佐を仕事という概念から遠ざけているように思われてならなかった。こうして天井を見上げながら、伯爵はいつたいいまなにをしているだろう、とぼんやり考えることがよくあった。あの愛らしい足をスリッパに包んで、歩きまわっているかもしれない。あるいは柔らかいガウンに身を包んで、ベッドに、もぐりこんでいるかもしれない。たくさんさんの服をがらりと並べて、あれこれ着たり脱いだりしているかもしれないし、宝石を山盛り取り出して、ひとつひとつつけては外しているかもしれない。おとなしく読書をする、音楽に身を任せる、絵を描く、思いつくままにことをノートに綴っている可能性もある。そのノートの中に、一度

くらいエーベルバツハ少佐の名前が登場するといいいのだが！
あるいは暗示的に「きみ」とだけでもかまわない……………

少佐は微笑し、煙草に火をつけた。

翌日の朝食の席でも、相変わらず資料の話はまったく出なかった。少佐はエステン氏と食事をし、二階へ行つて新聞を読んだ。そうして十時を過ぎてから別れた。

別れ際、伯爵がエステン氏を探してぶらぶらやってきた。起きたばかりなのか、まだどこか眠気のとれないところとした目をして、見事な黄金の巻き毛を窓から差しこむ陽光にさらし、シンプルな暗紫色のタイカラーのブラウスとパンツに、千草模様が刺繍されたガウンを羽織っていた。彼は仲良く並んだふたりに目を留めると、少し離れたテーブルの前で立ち止まった。エステン氏が微笑みかけ、新聞を畳んで立ち上がった。少佐も立ち上がった。伯爵は少佐に微笑んで「Morgen」と挨拶した。少佐も挨拶を返した。

「われわれは午後から動物公園の中を少し散策しようと思つているのですが……」

エステン氏はそこで確認するように伯爵をちらりと見やつた。伯爵は微笑し、目を伏せた。

「よろしければ、ご一緒にいかがですかな」

少佐も確認するように伯爵を見やつた。伯爵は微笑を浮かべたまま、うつむいて、布張りの椅子に刺繍された模様のつた部

分に沿つて指をすべらせていた。彼の指先はからかうようでもあり、誘うようでもあり、ともに戯れるものを求めるかのように寂しげでもあった。

少佐は瞬時、自分がなにか強い衝動につき動かされそうになるのを感じた。彼の目は、椅子の上でひとり遊ぶ伯爵の指から引き剥がすことができなかった。大きく弧を描き、小さくくるくると回り、指は丹念に刺繍の模様を追っていた。少佐は同行を承知した。エステン氏に促されて、伯爵は指をしまい、少佐に一瞥を投げて、その場を後にした。少佐はしばらく彼の消えたあとの空間を見つめていた。それからろろと動きだし、伯爵の指が遊んでいた椅子の布張りの部分に手を置いた。少佐はそこをゆっくりと撫でた。あの指がたどっていた模様の部分を、時間をかけ、丁寧に撫でさすった。

あのように彼を促し、どこかへ導くのは、エステン氏ではなく自分ではない。彼が寝起きでぶらぶらと探しに来る男は、自分でなければならないのだ。少佐はそう感じた。これは間違っている。この状況は、間違いなのだ。正されるべく自分に差し出された間違いだ。

ホテルのレストランで、三人は同じテーブルにつき、昼食をとった。エステン氏はよくしゃべった。少佐もよく相づちを打

った。伯爵は控えめに、どちらかというと食事を楽しんでいった。彼は襟と袖口にフリルのついた、暗紫色のハイネックのブラウスを着ていた。ブラウスの上から、四連の真珠が連なったネックレスをしていた。クラス部分は繊細な金細工にダイヤモンドがはめこまれたもので、その下に大粒のサファイアをダイヤモンドで囲んだひし形のペンダントが下がっていた。耳からは、同じく真珠とサファイアとダイヤモンドの組み合わせの、小さな涙型のイヤリングがぶら下がっていた。

ワインが白から赤に移り、伯爵のグラスが空になった。すぐに給仕がやってきて次を注ごうとしたが、テーブルにたどりつく前に、少佐が手を振って追い払った。伯爵はことに昼食では、飲む量を決めており、それを守っていたからだ。それは完全に無意識の行動だった。少佐は、給仕が下がってから自分のしたこと気がついたが、いまだ弁明のようなことをするのめばかगेていふと思つた。おそらくエステン氏も伯爵も、少佐の行為に気がついていたに違いないが、気づかないふりをしていた。少佐はひっそりと苦笑を浮かべるのを止められなかった。

食後のコーヒート紅茶が運ばれてくると、エステン氏が用を足すため、断つて席を立つた。ふたりはしばしテーブルに残された。少佐はちらりと伯爵を見た。伯爵はうつむき加減で紅茶を飲んでしたが、口元はかすかに微笑していた。カップを置くと、彼も少佐を見た。目があった。伯爵は微笑し、すぐに目を

そらした。

「そのネックレスははじめて見る」

少佐は彼の胸元を見て云つた。伯爵も自分の首からぶら下がったものを眺め、手にとつて、少し持ち上げた。それから少佐を見た。

「もつとも、おれの知らんアクセサリーなんぞわんさかあるだろうがね。そいつは似合つてる」

伯爵はうれしそうに小さく微笑んだ。

「似合つてるのはいいが、真珠はどうも冠婚葬祭を思わせる」

少佐はコーヒートを飲んだ。

「うちのばあさんが大事にしとつた、代々伝わるやたらと時代がかつたひとそろいの真珠のやつがあるんだ。とつておきのときにつけるやつでな、耳にぶら下げるのなんぞ、粒がこんなにでかいんだ（少佐はひと差し指と親指で大きな丸を作つた。ガキのころ、そいつをくつつけたばあさんの写真を見て、おれは耳がちぎれんのだろうかと思つたもんだ）」

伯爵は笑い声を上げた。

「シャルロットおばあさんのこと？」

少佐はそうだと答えてうなずいた。一瞬だが、ふたりのあいだにわだかまりのない空気が流れた。

「おまえになら似合うかもしれん。普通なら、真珠が浮いちゃうだろうが」

伯爵はふたたび視線を自分のネックレスに移した。その口元は、確かにこれまでよりもずっとほころんでいた。

彼らはブランデンブルク門をくぐり、ぶらぶらと公園の中へ入っていった。入ってすぐに大通りから離れ、遊歩道をのんびりと散策した。木々はすでに葉を落とし終え、枝をむき出しにした姿になっていた。枯れ草色をした葉が地面を丹念に覆うように散っていた。空はどんよりと曇り、ときおり分厚い灰色の雲の陰から、太陽が弱々しく顔を出してはすぐに引っこんだ。ベルリンは、晩秋から一氣に冬へ向かおうとしていた。

齢七十を過ぎ、八十に迫ろうとしているエステン氏は、まだまだ衰えを見せてはいなかったが、もう杖の助けなしに長時間歩くことは難しくなっていた。彼はのんびりと、冷たく乾いた空気を吸いながら、若いふたりを両脇に従えた散策を楽しみ、戦勝記念塔へ向かう途中で継続を断念した。

「わたしはここで休んでいるよ」

彼はベンチに慎重に腰を下ろして云った。

「少し疲れた。きみたちは好きなだけ歩いて、帰りにまたここへ来てわたしを拾っておくれ。もしわたしがいなかったら、そのときはくたびれて先に帰ったのだから気にしないで戻るといい。さあ、好きなところへ行つて。わたしは雲を見ているよ……」

……これは飽きるということを知らない楽しみのひとつだ……」

少佐は小さく会釈し、伯爵を促して歩きだした。伯爵はおとなしくついてきた。彼はセーブルの、上品な毛皮のコートを着ていた。伯爵の金髪はそれによく映えた。少佐は定番のトレンチコート姿で、伯爵と肩を並べた。

彼と並んで歩くのが、少佐には不思議と心地よかった。少佐は自分の自然なリズムで歩いており、伯爵もそうだった。お互いに歩調に関して少しも気を配らずに、ふたりは自然に並んで歩くことができた。少し速度を落としたり、早めたりする、その感覚がふたりはとても似ていた。伯爵がいつだか、そのことについてこう云ったことがある。「ほらね、同性とつきあうことには、こういうメリットもあるんだよ……」

あのとき、ふたりはケルンの聖ウルスラ教会を出て、クリンゲルプツ公園を散策していた。季節は夏で、公園は緑に燃えていた。伯爵はふいに木の陰に隠れたり、また出てきたりして、少佐の目を楽しませた。夏の強い日差しの中で、彼の金髪はけぶっていた。少佐は金髪が目にしめる感じがすると云い、伯爵を笑わせた。

「そんなこと云われたの、はじめてだ」

伯爵は微笑んだ。幸福そうな、美しい笑み。

あのときからずいぶん時間が流れたように感じ、ずいぶん遠出をしてしまったような気がする。ふたりのあいだも変わっ

た。あれはふたりの最初の夏だった。伯爵の誕生日が目前に迫っていた。少佐はちつとも思いつかないプレゼントのことでやや焦っていたのだ。ぼんやりとそれについて考えながら歩いていたら、伯爵の顔がふいに目の前にあらわれ、まじまじと少佐の顎のあたりを見つめて、

「きみって、髭を伸ばしたことがある？　ないんじゃない？　でも伸ばしたとしたら……セクシーだろうな！」

と、指でそのあたりをたどったのだ。あのときから、ときは流れ、彼らの関係はさらに深く、重く、ぐんぐん沈んでいった。いまや彼らはその最奥に、ふたり裸で横たわっていた。身動きがとれず、逃げ場もなく。窒息しそうな深みの中で、お互いの顔を見つめたまま。

少佐は煙草を取り出し、口にくわえ、ライターを探してポケットをまさぐった。ふいに横からすつと、黒い手袋をした手に支えられたライターが、少佐が探していたところのライターがやってきて、煙草に火をつけ、少佐のトレンチコートのポケットトへ入っていった。少佐は眉を上げ、伯爵を見た。

「泥棒」

「返しただろう？」

ライターはポケットの袋へ確かに落ちた。しかし、黒い手はなかなかそこから去らなかつた。その手は逡巡していた。ポケットの中で、少佐の太股の上で、そこへとどまるべきか、触れ

ていいものか、抜け出すべきか、迷っていた。少佐は煙草を吸い、口から外した。そして空いているほうの手をポケットへすべりこませた。遠慮がちに、しかし待ちかねていたように、伯爵の手が絡みついてきた。カシミヤの柔らかな手触りだった。けれども少佐はその感触にいらいらしてきて、狭い空間で苦心して手袋を外した。素肌が触れた。伯爵が小さく震えた。

少佐は伯爵の手を押さえこんだ。握りしめ、丸めこみ、それから、ゆつくりと離して、伸ばし、手のひらを、甲を、指の一本一本を、優しく探った。薬指には指輪がはまっていた。伯爵が息を飲んだ。少佐はやめなかつた。やがて伯爵の頬が、遠慮がちに少佐の肩に触れた。少佐は前を見つめて煙草を吸い続けながら歩いた。

ふいに伯爵が少佐の腕を掴み、ぐつと引いた。少佐は立ち止まり、ゆつくりと首を回して伯爵を見た。伯爵はお互いの腕に腕をからめつけたまま、少佐の肩の上で、じつとこちらを見つめていた。

少佐は煙草を投げ捨てた。外に出ているほうの手で、伯爵の金髪をかきあげた。伯爵がゆつくりと目を閉じた。少佐はそのまま柔らかな金髪を、流れに沿って撫でた。伯爵のまぶたが再び開いて、それから誘うように閉じた。少佐は引きこまれるように口づけた。ポケットの中で、伯爵の手が少佐の手を握りしめた。……

少佐は彼を掻き抱いて、なにもかも終わらせたい衝動に駆られた。口づけ、謝り、彼を信じることを誓うのだ。そうすれば、抜け出すことは可能だった。いまずぐに元に戻ることも可能かもしれない。でも、そうしたところで解決にはならないということはわかっていて。少佐は、まだ苦しまねばならない。そして伯爵を苦しませねばならない。

少佐は苦勞して唇を離した。伯爵は少佐に従って唇を離すのが、いかにも嫌そうだった。でも彼はそうした。少佐がしたことの意味を、知っているに違いなかった。ポケットから、手袋が出ていった。伯爵は急いで手袋をはめたが、少佐は彼の指の上できらめく、エメラルドの華奢な指輪を見た。そしてそれは、少佐が以前に彼に贈ったものだった。伯爵の身体が離れ、少佐は自分の肉を切り取られたような気がした。伯爵がなにかを問いかけるように、少佐を見た。彼は伯爵に微笑んだ。ふたりはまた並んで歩きだした。

「エステンさんはほんとうはいまごろ、昼寝の時間なんだ」

伯爵は云った。

「ベンチで寝てないといけれど。風邪を引いちゃうからね」

「彼とは同室にできなかったのかね？」

少佐は訊いてしまつてから、しまつたと思つた。伯爵はじつと少佐の顔を見つめてから、小さく首を振つた。気分を害した様子はなかった。

「エステンさんは、きみと一緒にの部屋に寝るには、わたしは年寄りすぎる、つて。彼はとても遠慮深いし、紳士だからね」

伯爵は微笑した。それからふいに顔を引き締め、少佐へ向けた。

「でも、添い寝してほしいつて、云つてくるひともある」

伯爵はじつと少佐を見つめて云った。

「そうしたからつて、なにをするわけじゃあないけど。歳を取つてくると……あるいはそれほど取つてこなくても……ひととはだんだんわがままになるし、ひと恋しくなつてくる。だんだん、孤独を感じてくるんだ、人生が、ある時期を超えてしまふと」

伯爵はまた前を見た。

「わたしには、わかるんだ。わかつたからつて、なにができるわけじゃないよ。それは本人の問題だから。でも、わたしはできることはする。譲歩する部分もあるし、しない部分もあるけれど……わたしたちの多くは、長いつきあいだから。長くて、たぶん少し独特なつきあいだから」

伯爵はまた少佐に視線を戻した。ふたりはしばらく黙つてお互いを見つめあつた。少佐は伯爵の揺れるまつ毛を見ていた。

伯爵はたぶん、少佐の押し殺したような息づかいを、感じているにちがひなかった。にぶい日差しが、あらゆるものをぼんやりと包みこんでいた。舞い落ちた枯れ葉が風に巻かれて、からからと乾いた音を立てた。

伯爵がふいに微笑した。

「わたしたち、まるで昔に戻ったみたいだね」

その声はかすかに弾んでいた。

「きみが、わたしに関するあらゆることに遠慮がちに、考えながら、計りながら、じりじり進んでいたときに。あのころ、わたしほんとは、毎日すごくどきまぎしていた。きみみたいの手探りでそつと、慎重に自分を運び出してくるひとを、わたしは知らなかったから」

伯爵は一瞬、なつかしむような微笑を浮かべた。

「きみって、不思議なひとだよ。大胆で向こう見ずで荒っぽいくせに、とても優しく、繊細で。ときどき、もみくちゃにされてしまうような気がするが……」

伯爵はそこで少しことばをつまらせた。まつ毛が数度はためいた。

「でも、きつと、きみも同じなんだろうね」

彼は小さく吐き出す息にことばを混ぜこむようにして、静かに云った。

「……………ああ」

少佐は云った。伯爵はなにかを振りきるように微笑み、前を向いて、歩きだした。

地下道を通って、ふたりは戦勝記念塔の前に出た。六十メートル以上もある塔のてっぺんで、黄金の勝利の女神、ヴィクトリアが誇り高く輝いていた。天を押し返すように、黄金の羽根を広げて。

「もちろん、この女神はたいそうすばらしいと思うけど」

伯爵が塔を見上げながら云った。

「こんなふうに金ぴかに作るの、俗悪だと思うな」

「俗悪だ？ わかっとらんなあ」

少佐は伯爵を見、それから塔のてっぺんを見上げて云った。

「生きるか死ぬかの状況で戦う人間のことを考えてみる。そいつがやっとこ終わって、しかも勝利を手にしたとわかったとする。たいがい気が抜けて、しばらくものも考えられんが、そのうちになあ、ふいに頭上から光が射してきて、神々しい女神が降りてくるんだ。おれにはわかる。こういう金ぴかの勝利の女神がいるんだ。こいつは象徴でもないんでもない。実際にいるんだ」

伯爵は少佐を見、それから女神を見上げた。

「きみは、その女神を見たことがあるの？」

少佐は伯爵に向かってにっと笑い、それから女神を見上げた。

ふたりはずいぶん歩いたので、帰りはバスに乗りうとして、

ぎりぎりのところでエステン氏のことを思い出した。本当にあぶないところだった。あわてて元来た道を戻ってみると、エステン氏はベンチの上でうつらうつらしていた。伯爵が彼を揺すって起こし、また三人並んでホテルへ帰った。少佐はふたりとエレベーターの前で別れた。上層階へ向かうエレベーターへ乗りこむ直前、伯爵が探るような、そしてするがするような目を、一瞬向けてきた。少佐はうなずき返した。伯爵はなにか云いたそうに唇を動かしたが、扉が閉まりはじめてしまった。

……おれたちはずいぶんばかだと思わんかね。少佐は閉じてしまった扉に向かって、心の中でそうつぶやいた。こんなとき、ふたりとも、感情を大っぴらに出しあえるような人間ではなかった。大声を上げて喧嘩して、吐き出すものを吐き出しきつてしまえば、もしかすると楽なのかもしれない。そしてきつと、そのほうが手つとり早いに違いなかった。でも、彼らにはそれはできなかった。そうするにはあまりにも真摯な、あまりにも愚直に過ぎるものを、ふたりとも持ちあわせて生まれてきてしまっていた。彼らはもどかしく、じりじりと、はつきりとなにかが見えてくるまで辛抱強く待ちながら、進むしかなかった。

翌日の明け方、というよりまだ夜中といっていい時間に、少佐はAからの報告で目覚めた。枕元の時計は午前三時すぎを指していた。

「こんな時間に申し訳ありません、少佐」

Aもおそらく部下のひとりからの報告で起きたのだろう。しっかりとはいいるが、まだどことなく眠気を引きずった声をしていて。美しい細君も目が覚めてしまつて、Aの隣で心配そうな顔をして、夫を見守っているに違いなかった。

「よけいな気遣いはいらん。なにがあつた」

少佐はあえて冷たく云つた。

「Dからたつたいま報告がありました。エステンが借りていたドイツ銀行内の貸し金庫が破られて、中に入っていた資料が盗まれたそうです」

Aの声は冷静そのものだった。

「カーンのチームのしわざです。あいつらはみごとにやってのけましたよ！ 警備員を買収したらいいんです。巡回していた別の警備員が異変に気づいて通報しましたが、もう逃げ去つたあとのことで、あまり意味はなかったようですね……」

少佐は一気に目が覚めた。実にすてきな目覚めだ！ 彼は額

に手を当て、ひゅうつと口笛を吹いた。

「カーンのやつ、いよいよとち狂つてきおつたな。そんなことをしてただですむと思つてるのか？ ……いや、そうだな、向こうさまは天下のBNDだ。お手柄だがいささかやりすぎだ、と注意されて終わりだろう。やつ のやりかたは理にかなつとる。洗練のかけらもないが」

「ええ、少佐。われわれはまんまと出し抜かれたんです。申し訳ありません」

「おまえが謝つてどうする、ばか者。それより、このあとが問題だ。カーンのやつ のことはよく知つとるが、あいつはすぐに資料を提出することほせんだろう。しばらく状況を楽しんで、たぶんおれに取引のひとつも持ちかけてくるんだろうな。くそいまいまいが。いまいるやつ のほかに、これに割ける人員はいるか？」

「ええ、少佐、Bが現地にいます」

少佐は予想外のことにびくりと眉をつり上げた。

「B？ あいつは暇なのか？ ミュンヘンにおるはずだろう」

Bはほかの任務に忙殺されていて、エステンの件には関わっていないはずだった。

「昨夜遅くに片がついたんです。遅かつたので報告しませんでした、が、国内最終便になんとか間に合うような時間に。本人は奇跡と云つてましたよ。Bはその足でパウツェンに向かいまし

た。エステンの件を聞いて、どうも気になる。カーン一味には、あいつもいろいろと恨みつらみがありますからね。あなたには云うなと云われましたが……実はDからの連絡のあと、Bからも連絡があったんです。あいつはいま、銀行から逃げたカーンの部下を追跡しています。あいつの追跡なら、まず信頼していいでしょう。DとEを貸してくれといわれたので、その通りにしましたがよろしかったでしょうか？」

少佐はそれを聞いて、半ば本気で腹を立てていた。BはAのことをお母さんのなんだのとよくからかうが、そのBのおせっかい焼きだつて、Aといい勝負だった。

「よろしかったかだと？ 追跡云々なんぞどうでもいい。あいつは少なくとも次の件に首をつっこむ前に、おれに報告して指示を仰いだ上で報告書を作らねけりゃならんはずだぞ。規定破りもいとこだ。あのばかめ、ボンに帰ってきてても、しばらくものを食わせるな。いいダイエツトになる」

Aは笑つて、そうかもしれないね、と云つた。

「状況はわかつた。首をつっこんじまつたもんは仕方がない、Bからの報告を待つとするか。朝までに次の報告がなければ、なんらか手を打たねばならん。いずれにしても、電話をくれ。それからおまえの奥方に、夜中に迷惑をかけてすまなかつたと伝えてくれ……」

少佐は受話器を置いた。彼はもう眠らなかつた。六時前に

また電話がかかつてきた。

「おはようございます、少佐」

Aはいづいかなるときにも挨拶を忘れることのできない男であつた。

「Bからの報告です。彼らはパウツェンから、ベルリンへ向かつて走行中とのことです。おそらくは、このまま市内にあるカーンの自宅へ直行すると思われます」

「わかつた。次にBから連絡があつて、もしその通りなら、あとはほかの連中に任せてきさまはとつと帰つてこいと伝えてくれ。おれが規定違反に怒り心頭だつたとな」

「承知しました」

きまじめにそう答えるAの声はしかし、半ば笑つていた。

午前八時半前、Aからふたたび報告があつた。Bの読み通り、資料はベルリンのカーンの自宅へ運ばれたとのことだった。Bからの伝言。少佐、心から謝りますから、どうかおれのめしを抜かないでください。

少佐はしばらくひとりでくつくつ笑つていた。

「おれのせいじゃないですよ、少佐、やゝな予感でしたんです」それが、少佐に報告の電話を入れてきたBの第一声だった。「なんとなく胸がもやもやして、それから無性に腹が減つてき

たんですよ。少佐も知ってるでしょ？ おれのこの天賦の第六感！」

「おまえの第六感、どうも胃袋あたりにあるらしいな、いつも思うんだが」

少佐がそう云うと、Bはひとがよさそうに朗らかな笑い声を上げた。

「おかげで、昨日の夜からカーリブルストを五つも食っちまいましたよ！ また女房にしかられるんだ、どうせシャツのシミとかなんかでばれるんですよ。うちの女房の勘のよさときたら、あいつがエージェントになるといいや！ で、報告なんです、少佐」

「続ける」

少佐は受話器を耳に当て、ベッドに転がりながら、もう半ばにやついていた。鷹揚でのんきなBの声は、必死のときでさえも、どこか周囲を笑わせるものを持っていた。

「Aが報告したこと以上につけ加えるものなんかほとんどないですけどね。おれは空港で車を手配して、ぎりぎり銀行から滑り出した黒塗りのBMWを見るの間に合ったんです。こいつは怪しいと思ったんで、とりあえずあとをつけました。車には男が三人乗ってましたが、助手席に乗ってたやつにどうも見覚えがあったんでね。やつらが給油したり小便したりしてるあいだに、おれはAに連絡したりDに連絡したり、Eが来るのを

待ったり、この忙しかったこと！ この際だから云わせてもらいますけどね、みんなおれの胃袋と膀胱が特大なことに感謝するべきなんだ！ カーリブルストの五つくらい大目に見てもらわなきゃやってられませんよ！ でもやつらは慎重でしたよ。

途中で三度も車を変えました。最終的にベンツのタクシー車両に格上げ。そいつがくそつたれのカーンの家にすべりこんでいくのを見届けたのが午前八時十一分。運転手役以外のふたりの男が家に入っていました。タクシーはすぐにどこかに行きましたが、そっちはEの担当です。無害だとは思いますがね。おれは念のためしばらく家の様子を見張ってたんですが、八時三十五分に、カーンは愛用のベンツで出勤しました。車には、ちやっかり部下たちも乗ってましたよ」

「資料を持って出たと思うかね？」

少佐は報告を遮って訊ねた。

「確かなことは云えませんが。できたら確認したかったんですが、あいつの家には奥さんと犬がいるし、近づけばお隣さんから丸見えだし、気づかれずに覗くのが難しいんですよ。だから正確に云えば見てはいないんですが、まず間違いないですね。BN本部より安全な保管場所がありますか？ セキュリティばかり、入館管理きつちり。やつはきつと持っていたと思いますよ。一応自宅の監視にDを置いてきましたけど。遅くとも明日か明後日には、きつと少佐のところに得意げな電話がいきます

よ。あいつらにやあ、情ってもんがないんだ。腹が立つなあ！」
電話の向こうから、まったくだとか、ほんとにとかいいう別の部下たちの声が聞こえてきた。

「で、見るとこれまで見たんで、おれはDにあとを頼んでAに連絡しました。そしたら少佐がおかんむりだって聞いたんで、あわてて帰ってきたんですよ。おれからの報告は以上です、少佐。ほかになにか、おれにできることはありませんか？」

なんとまあ、Bはまだ働く気があるのだ！

「ない。とにかく今日は家に帰って、嫁さんに殴られて寝ろ。わかったな。しかし毎度毎度、おまえはおれがいないとすぐに規定違反をするな。こうも繰り返されると、おれにはもう、かけることがない。今度から、きさまには誰か見張りをつけなければならん。このほか者め」

Bは少佐の声を、スピーカー機能で部屋中に拡散しているに違いなかった。受話器の向こうで、少佐のことばにあわせてどつと笑い声が起きた。承知いたしました少佐！ とやたらと威勢のいい声で返事をして、Bは電話を切った。少佐は思わず声を出して笑ってしまった。

部下からの報告ラッシュで、少佐はこの日のエステン氏とのうるわしき朝の習慣をすっぱかしてしまっていた。報告の嵐が

ひとまず落ちついたので、少佐はエステン氏の部屋に丁寧な詫言の電話を入れた。エステン氏は、銀行からとうに連絡が入っているだろうに、そのことはちっとも云わなかった。そのかわりに、ご一緒にお茶でもいかがですか、と云った。

ふたりはホテルのラウンジにあるバーで顔を合わせた。少佐は自分の知り得たことを報告し、エステン氏に心からわびた。

「こんなご迷惑をおかけするつもりはありませんでした」

エステン氏は微笑し、首を横に振った。

「いいんです、少佐。あなたのせいではない。他人の邪魔が趣味という連中は、いつの時代にもいるものです。楽しい趣味かどうかは知りませんが。わたしの考えが甘かったんだ。第一、わたしは自分の持っている資料が、後日そんなに尊ばれるものとは思っていませんでしたからね。そんな話を聞かされたときには、なんだかうんざりしたものです。また、わたしのなにかが必要とされるようになるとはね……」

エステン氏は丸眼鏡を持ち上げ、椅子に深くもたれてため息をついた。

「まだ資料を取り返せる見こみがあります」

少佐は云った。

「カーンの性格からいって、数日のあいだ、資料を自分の手元に置いておくはずですよ。もったいぶるのが大好きなもんでね。そのあとで、おれになんらかの取引を持ちかけてくるに違いな

い。あいつは、自分を顕示しなけりや気の済まない男ですからな。おれとしては、取引に応じてでもなんでも、とにかく資料はすべてあなたにお返しするつもりです」

エステン氏は少し身体を起こして、真剣な表情で少佐を見返してきた。

「おれはあなたがそういう気になるまで、あの資料はそつとしておくべきだと思う。そのつもりなら、燃えてなくなつたつてかまうこたあない」

少佐は微笑した。

「それはあなたが決めることだ。おれは正直に云つて、あなたの寛大さに感服しとるんです。おれなら、資料をよこせと云われたとたんにぶち切れて全部燃やしたでしょうから」

エステン氏は、長いことなにも云わなかつた。沈黙して、じつと膝の上に置いた自分の手を眺めていた。やがて、彼はため息をつき、小さくうなずいた。

「感謝します」

彼は目の前に置かれたままで、すっかり冷たくなつたカップから飲み物を飲んだ。

そのとき、伯爵がふらふらとバーに入つてきた。薄手の黒のニットに、ウールのガウンを羽織つていた。彼はふたりの座るテーブルへやつてきて、曖昧な微笑を浮かべたまま、ふたりを見下ろした。

「あなたを探してここまで来ちゃつたんですよ」

伯爵は甘えるようにエステン氏に云つた。

「今日着る服のことで相談しようと思つたのに」

「おやおや、それはすまなかつたね。少佐と少し話をしていたよ」

エステン氏が優しく諭すように云つた。

「ずいぶん仲良くなりましたね？」

伯爵はからかうようにふたりを交互に見やつた。エステン氏は笑つて、立ち上がった。テーブルをあとにする前に、伯爵は少佐に向かつて、ちらりと気がかりな視線を投げた。

部屋のドアを開けたとき、足下に封筒が落ちてゐるのに気がついた。少佐はかがみこんで拾ひ上げた。白い厚手の封筒の表には、よく見知つた非常に美しい字で少佐の名前が記されており、裏返すと時代がかつた赤い封蝋がしてあつた。その印章にも、少佐は見覚えがありすぎるほどあつた。

窓辺にしつらえられたソファに腰を下ろし、備えつけのペーパーナイフで封を開けると、伽羅の繊細な香りがかすかに広がつた。少佐は微笑を浮かべ、その香りを余さず嗅ぎとろうとするかのように、大きく息を吸いこんだ。それは伯爵が夜になると寝室に必ず炊きこめる香りだつた。寝室へ入つていくと、そ

の非常に官能的な香りは、かすかにむせかえるような、染み入るような煙の刺激とともに鼻から入ってきて、少佐の五感に甘えるように訴えかけた。部屋じゅうに渦巻いているほのかな木の香り、そして伯爵が用いている龍涎香を使った香水の香り、薄暗い蝋燭の明かり、壁やベッドの天蓋からぶら下がる薄手のカーテンに映りこんで揺らめく、妖しげな影。香りにつられて、少佐は思い出した。伯爵は自身もまた男でありながら、誰よりも少佐を男であるという誇りに満ちた気持ちにさせた。あるいはそれは、男であるから可能なのか？ そうかもしれない。少佐は天井を見上げ、しばらく封筒の開いた口に鼻先をあてがって、香りを嗅ぎ続けた。

それから中の紙を引っぱりだした。厚手のクリームがかった高級紙は、パーティーの招待状だった。伯爵を囲む夕べ。主催、フランク・ゲルプマン。本日夜八時より。会場はベルリン郊外のゲルプマン邸。正装でお越しのこと。

少佐は二度、招待状を読み返した。フランク・ゲルプマンなる男に心当たりはなかった。どの道伯爵のお友だちには違いない。伯爵は欧州いたるところにお友だちがいて、その都市を訪れると律儀に顔を出すのだ。そうするとすぐに伯爵のためのパーティーが開かれる。お友だち連中は皆、伯爵に会いたがっているからだ。

伯爵の意図はわからなかった。少佐になにかを見せようとい

うのか、それとただそばにいてほしだけなのか？ 決め手はなかった。少佐はしばらくぼんやりと天井を見上げたまま考え続けた。

Aから朗報が入った。カーン夫人がテレビ通販で収納棚を購入しており、それが本日の夕方に配達されることになっているというのだ。カーン夫人は買い物魔で、ブランド品を買い占めるといふより、安物を買ひ漁って身の回りをいっぱいにしてしまうタイプだった。カーンを知っている同業の連中は、皆このことを知っていた。しかしカーン本人はぜんぜん知らなかった。彼は善良だがあまり賢くない女を選んで結婚した。そしてそのことで安心しきっていた。結婚生活というものの中にはある種男を鈍らせ、墮落させるものがひそんでいるのではあるまいか？ 強引で切れもののスパイも、こと家庭においては気のつかない平凡な亭主だった。彼ら夫婦には子どもがなかった。そしてカーンは、少佐のように仕事でしょっちゅうあちこちを飛び回っていた。

少佐はそれに飛びついた。DとEはすぐさま運送会社の配達員となるべく準備を開始した。応援として、下っ端のZがその見てくれのためだけに選ばれて派遣されることになった。Zはしようことなしにパウツェンに飛び、作戦に加わった。

午後五時半すぎ、DとEが配達員としてカーン宅への侵入に成功した。彼らは二階の部屋のひとつにものを運ぶよう夫人から指示を受け、夫人といっしょに階段を上がっていった。最後の一段を上り、夫人が部屋のドアを開けて場所の指示をし終えたとたん、玄関のチャイムが鳴らされた。夫人は対応するためにややいらだたしげに下へ降りていった。化粧品の訪問販売員に化けたZが、うるわしいスーツを着こなし、かすかに香水の香りをただよわせてにこやかに玄関前に控えていた。

少佐はZの女受けする容姿を、実に正しく評価していた。見目麗しい男の化粧品販売員。カーン夫人は、そのいささか思わせぶりの取り合わせに一瞬驚き、Zの純朴そうなにこやかな笑みに引きこまれ、家具の組み立てなんて十分十五分はかかるでしょう、彼らに任せておくあいだ、少しこちらなど眺めてみるのはいかがですか、なるなめらかな誘い文句に誘われて、Zが居座ることを許してしまう。二階の様子を気にしながらも、目の前の麗しい、鍛えられた男らしい身体つきをしていながら、なにやら女性的なものを思わせる男がやたらと気になって仕方がない。いくつくらいかしら？ 二十五とか六かしら？ それとも七か八？ あなたどうしてこんなお仕事してるの？ ぼくには姉が三人もいるんですから（Zはあきらかに伯爵を手本にしていた）、化粧品や女性の持ち物のことには詳しいんです……こういう業界に入ってくる男はまだ珍しいですから、採用さ

れやすいんですよ……こちらのファンデーションなどいかがですか？ 粒子が非常に細かいので、肌をびったり覆って、赤ん坊の肌みたいになめらかにしてくれますよ……あら、ほんとう……

この間、配達員のふたりは死にものぐるいの働きを見せていた。実際のところほとんど組み立てがすんでいた家具をとつとと設置して、怪しい場所をくまなく確認するのだ。確認が終わると、彼らは一階へ降りていった。終わりました、奥さん、まいどありがとうございます……配達員が出ていってしばらくすると、Zもそれとなくサンプルを置いて家をあとにした。G先輩の化粧品と、名称覚え書きが効きました、移動中に丸暗記ですよ、とはZの弁である。

カーンはやはり、フィルムを家に置いておくようなまぬけではなかった。わかつていても、できるなら確認せずにはおかないのがエーベルバツハ少佐だった。これで万事休すだ、と少佐はベッドに転がって考えた。BND本部に侵入して、資料を盗み出すような芸当を披露できる部下はさすがにいない。そもそもそんなことができるスパイなどいるまい。自称（そしてたぶん実際に）世界一の怪盗エロイカあたりは別にして。でも彼は、セキュリティ対策万全の、のつべりとして無粋な灰色のビルなど大嫌いだ。彼は彼のために仕事をやる。そこにはなにものによってもおびやかされない誇りと自負がある。そして男の仕事

というものは本来、そうでなければならぬ。

エーベルバツハ少佐は、しぶとくしつこい不屈の精神に關しては定評があつたが、どうにもならないとわかつたときのあきらめのよさにかけても定評があつた。少佐はひとまずカーンから資料を取り返すことをあきらめた。彼の異常性顯示欲は、必ずや少佐に連絡をして資料の交換を持ちかけずにおかないだらう。奪還の機会があるとすれば、やつが資料を持つてやつてきたそのときを置いてほかにない。あるいは、条件次第では取引に応じるほうがいいだらう。この場合、エステン氏の小さな反抗の欲求が、少佐の名誉よりも重んじられるべきである。ほんとうの名誉とは、必要とあらば手放すこともできるものでなければならぬのだ。

時刻は午後七時半を回っていた。雨がばらついていて、少佐はホテルの前でタクシーに乗りこみ、パーティー会場へ向かった。モーニングを着るのは好きでなかった。子どものころから、正装は大嫌いだ。ほんとうに仕方のないときだけ、少佐はそれを着た。正式な場には、許される限り軍服を着て出席することになっていた。そのために、伯爵とはじめて踊ったあの日、あのウィーンでの日にも、少佐はスーツ姿だった。伯爵は美しいドレスを着ていた。彼は美しかった。そして、無粋なスーツ姿の少佐に気分を害したようすもなく、ワルツにあわせて楽しそうに踊ったのだ。あのきらびやかな雰囲気、あの古典的な曲、伯爵の古典的なドレス、慇懃なワルツ。

タクシーが目的の場所へたどり着くのに、二十分ほどかかった。少佐の目は窓越しにベルリンのきらめく夜の街並みに注がれていたが、心のうちはあの日の伯爵を追いかけていた。ずいぶん遠い日のことになってしまった気がした。少佐はその思い出こと、伯爵をふたたび引き寄せねばならない。今夜が勝負だ、という気がしていた。伯爵とお友だちとの関係を、伯爵の華々しいエロイカとしての顔を、少佐がどのように処理するかの、ぎりぎりの期限であるような気がした。これを逃したら、もう

伯爵をふたたび呼び戻すことは不可能になるという気がした。

ベントのタクシーは大きな邸宅の門から中へ入っていく、車回しのところで少佐を下ろした。持ち主の財力が一目でわかるような、広々とした芝生に覆われた庭や、立派な建物が少佐を迎えた。玄関の前には男が控えていて、階段を上ってきた少佐に慇懃に礼をし、挨拶し、招待状を差し出すよう態度で圧力をかけてきた。少佐はふところから封筒を出し、男へ差し出した。彼は中身をあらため、一礼して、玄関の扉を開いた。

エントランスホールは吹き抜けになっていて、左右に螺旋状の階段が二階へ伸びていた。左右の階段のあいだに、男のトルソーが飾られていた。髪を感じこそ違ったが、そのギリシア的な端正な面立ちはどこなく伯爵に似ていた。

使用人らしき男がやってきて、少佐をうやうやしく迎え、ホールから右手の広間へ案内した。ダンスホールにも使用できそうな大きな部屋だった。天井のシャンデリアがまぶしく輝いて、あたりをくまなく照らしていた。床にはその光を吸収するかのような深い赤の絨毯が敷かれていて、白いテーブルクロスをかけられた円卓が並び、壁に沿って料理や飲み物の乗った長テーブルと、休憩用の椅子が置かれていた。庭へ通じるフランス窓は閉じられていて、カーテンがびっちり閉まっていた。会場の隅には楽器をたずさえた楽団が控えており、静かな室内音楽を流していた。会場はすでにモーニング姿のさまざまな年齢の

男たちがひしめきあっていた。全部で二十人ほどだろうか？ 彼らはいくつかのグループに分かれて、和やかな談笑の輪を作っていたが、広間の中央はぼつかりと空いていた。そこには華奢なカウチソファしつらえられていて、足下には目に鮮やかな中国製の絨毯が敷かれていた。ソファの両脇には、優雅な脚を持つ大理石の台に乗った、バラを生けた花瓶がしつらえてあった。シャンデリアのほぼ真下に当たるそこは、広間の中でもっとも明るく輝く場所だった。

そこが誰のためのものであるかは一目瞭然だった。パーティーの主役、このような特別な席を設けられ、もてはやされるにふさわしい人物。

ふいに、少佐は名前を呼ばれて振り返った。エステン氏が少佐の後ろで、モーニングに身を包み、微笑んでいた。

「あなたも招待を受けたのですか」

氏は優しくな笑みを、ややからかうようなそれに変えて云った。

「そうらしいですな」

少佐も微笑を返した。エステン氏はうなずいてぐるりと周りを見回し、

「それはよかった、実はわたしはここにあまり知り合いがいないう上に、九時には帰宅して寝につきたいほうでしてね。あなたがいてよかった。もしおいやでなければ、しばらくこの年寄り

の相手をしてくれませんか？」

少佐は喜んで引き受けた。エステン氏とは、実際に話すかどうかは別にして、話したいことがいろいろとあったし、確認したいこともいくつかあった。ふたりはグラスとつまみの乗った皿を受け取って、早々に壁際のテーブルを占領した。広間を傍観しているのはおもしろかった。なにしろ、男しかいないパーティー……中には女装しているのめいたが……というのは、なにやらすごみがあつて、まがまがしいものすら感じさせる光景だった。少佐は率直にそのことを打ち明けた。エステン氏はうなずいて同意を示した。

「わたしは伯爵をとて愛していますが、同性愛者とはいえません。だからこの光景は、たしかにはつきり云つて、やや息苦しいですな。わたしは結婚しているし、子どももいる。孫だつています。数年前に妻を亡くしましたが、そのとき伯爵はわたしをとてもいたわつてくれましたよ。頻繁に手紙や電話をよこして、慰めてくれました。あれはなによりわたしの助けになりました」

エステン氏が伯爵のことについて話すのはこれがはじめてだった。彼の目は、あのどこか遠くを見る、なつかしいものを見つめるものになっていた。

「自分が忘れられていない、と認識するのは、いくつになつても実にうれしいものですな。伯爵のことは、子どものころか

ら知っていますよ。わたしは先代の伯爵と知り合いだったのでね。すばらしい人物でした、彼は。いまの伯爵が、あのようになつすぐに育つたのも納得できます。彼は実にまっすぐに育っている、そう思いませんか？ 彼のいろいろな要素がそれを否定しているように見えますが、そんなものは見せかけだ。彼の中心は竹みたいになつすぐに伸びている。わたしはそれがうれしい」

少佐は黙つて、広間の中央の空間を見つめていた。まだあるじのあらわれないソファを。伯爵のいろいろな側面が思い出された。彼のあらゆる魅力、美点、欠点、さまざまなものが。彼はまっすぐに伸びている。おそらくそれはほんとうだ。ほかは見せかけだ……おそらく、それもほんとうなのだ。伯爵はまっすぐに……まっすぐ過ぎるのだ。少佐の考えでは。あけつぷろげで、なにもかもおつぷろげるものだから、エーベルバツハ少佐はそれらを全部消化しなければならぬのだ。

ふいに、広間の奥へ通じる木の扉が開き、部屋の中に風が吹きこんできた。そこらに散らばっていた男たちは話をやめ、いっせいに扉のほうを振り返った。少佐もそちらを見、エステン氏も丸眼鏡を持ち上げて、首を巡らした。

音もなく、伯爵は入ってきた。自分の横に立つぶくぶく太った、今日の主催、ゲルプマンと思われる初老の男に腕をかけ、彼はゆつくりと広間を横切つて歩いてきた。身体にびったりし

た、広い襟ぐりの黒いノースリーブブラウスと、同じくびったりした黒のパンツ、二の腕まである長いレースの黒手袋を身にまとい、肩に羽織つた、向こうが透けて見えるガウンの長い裾を引きずつていた。ガウンには全面に蝶と花のモチーフが刺繍されていて、胸のところに、すらんをモチーフにした、ダイヤモンドと真珠を用いたブローチがとめてあつた。首からは真珠のネックレスが三連ぶら下がつていた。そしてその美しい顔は、手袋とそろいのレースのアイマスクで覆われていた。

かかとの高いブーツにくるまれた足が、一步一步絨毯の上を踏みしめ、ソファにたどりついて、くると向きを変え、ゆつくりと組み合わされるまで、誰も動かず、ひとことも口を利かなかった。その場にいる全員の視線が、伯爵に釘づけになつていった。伯爵がソファに落ち着くと、すぐに給仕が駆け寄つてシヤンパングラスを手渡した。伯爵は微笑して受け取り、立ち上がつて、グラスを掲げた。全員が同じ仕草をした。伯爵がゆつくりとグラスを口元へ引き下ろし、ひと口飲んで、アイマスクに覆われた目で挑発するように自分を取り囲む男たちを見回した。あとに続いて、全員が同じようにした。グラスの中身を飲みほすと、伯爵はふたたびソファに腰を下ろした。その後ろに誇らしげに控えていたゲルプマンが、うやうやしくその顔を覆つていたアイマスクを外した。見事な造形の顔があらわになつた。

それはなにか神秘的な、秘密の儀式を思わせた。伯爵があらわれた瞬間に、彼はその場のすべてに魔法をかけたのだ。少佐にはそれがよくわかった。そして伯爵のアイマスクが外された瞬間に、その魔法が解けたように、男たちはいつせいに会話を再開し、ぞろぞろと動き出した。

「あの子のあの、あらゆる人間を魅了してしまう力は、すさまじいものだと思いいなりませんか」

エステン氏がほとほと感じ入ったようにささやいた。

「思います」

少佐は厳肅な顔で応じた。

「おれ自身、そいつにとっつかまっちゃって、身動きならんです」

エステン氏は振り返り、少佐を見た。

「そんなつもりはなかった」

少佐は伯爵を見つめながら続けた。いまや会場の男たちは、彼の前に一列をなしていた。ひとりずつ順番に、伯爵に挨拶し、手を取ってキスし、あるいはもつと親しい関係の者は頬にキスし、抱きしめ、ささやかな贈り物を捧げていた。男たちの顔は一樣に浮かれて、赤らみ、浮ついていた。

伯爵がなにを思っているのかは、いっこうに伺えなかった。彼の顔に張りついたままの謎めいた微笑のために。彼はいつでもそうだった。男たちの中にいるとき、彼はいつも微笑んでい

て、楽しんでいっているという感じを与えていたが、ほんとうのところどうなのか、改めて考えてみるとさっぱりわからなかった。少佐には、伯爵の真意がわからなかった。ものぐるおしい感じが、少佐をふたたび包みこみ、飲みこもうとしていた。自分の中心で、なにかが猛烈に沸き立とうとしているのを少佐は感じた。

「こんなつもりじゃありませんでした。こんなことに、自分の労力を使うつもりもなかったんだ」

少佐は云い、それからそつと、伯爵から視線を背けた。

「……致し方ありませんな」

エステン氏は小さく、あきらめたようにつぶやいた。

「こういうものは、どうしようもない羽目なのですよ、少佐。誰でもいい、年寄りに聞いてごらんさい。きつとそう云うから。落ちるつもりもないのに落ちてしまった恋だけが、本物です」

少佐はエステン氏を見やった。彼は伯爵を見つめたまま、思慮深げに微笑んでいた。

このやや場違いなふたりは、壁際のテーブルに陣取ったままおしゃべりを続けた。それしかすることがなかった。伯爵はしよつちゅう誰かに囲まれ、話しかけられ、氣遣ったり甘えたり

するのに忙しそうだった。男たちは伯爵の近況を聞きだし、あるいは伯爵の今後の仕事について聞き出したがっていた。

「次の獲物はもう決まっているのかね、伯爵」

長身瘦躯の、四十半ばらしきハンサムな男が訊ねると、伯爵は微笑を浮かべ、実はね、と切り出した。

「近々ひと仕事する予定なんです。わたしのいい子たちは、その準備の真つ最中。みんなががんばってくれるから、わたしはこんなふうにとりのらくらしてられるわけ」

「なにを盗むつもりだい？ 絵画？ 彫刻？ それとも……」

別の男が訊ねた。伯爵は意味深な笑みをもらった。

「内緒です。この仕事はとても大がかりだけど、でも、みなさんに聞こえていくことはきつとないんじゃないかな……」

「戦利品を見せてくれるだろうね？」

先の長身瘦躯の男が云った。

「もし機会があればね」

あの感じでは、その「もし」は永久に訪れないだろうなど、少佐は思った。伯爵の笑みは、相手をはぐらかすときのものだったからだ。もっとも、男たちのほうも、その場の会話を真に受けるような連中ではなさそうだった。なにもかもが茫漠として、煙に巻かれているようで、少佐はなんとなく気分が悪かった。

エステン氏はそんな胡散臭いパーティーの様子を観察して衆

しんでいるようだった。彼は出席者と個人的な関係を持つてはいなかったが、それぞれがどんな人物なのかは、なぜか非常によく知っていた。氏は少佐にひとりひとりを指さして、名前と職業、あるいはかつての職業を教えた。その場には、実にさまざまな人種が集まっていた。医師や弁護士や政治家といった社会的地位のある連中から、山師や軽業師、殺し屋、闘牛士なんてもいた。

闘牛士……スペインの伝説的な闘牛士、いまは引退したかつての英雄ドン・フィエルロのことは、少佐も聞いたことがあった。現役時代には非常な名声を博し、その優雅な戦いぶりから、マタドールの中のマタドールと讃えられた男。それは伯爵がときおり口にする名前……彼の愛するパパのひとりとして、敬意をこめて口にする名前のひとつだった。わたしのヒーローなんだよ、と伯爵は云っていた。

「もしかしたら、最初に好きになった男だったかも。五つか、六つのときだったかな？ 彼はまだ現役の闘牛士だった。わたしは父に連れられて、彼のショーを見に行ったんだ。すばらしかった。照りつけるぎらぎらした太陽、颯爽と出てきて、余裕の笑みで布を振る彼、怒り狂う雄牛、翻る赤い布、見事な剣さばき……わたしたちは彼の家に泊まった……彼はわたしにナイフ投げとか、牛の最期のこととか、いろんなことを教えてくれたよ。忘れられないマドリードのあの夏……」

ドン・フィエルロはこの広間について、誰と話をすることもなく、壁の隅にもたれて立っていた。五十も半ばを過ぎているだろう、灰色になりかかった髪を少し伸ばしてうしろでひとつに結び、身体に合ったモーニングを着こなしている姿は実に紳士的で、落ちついた貫禄を示していたが、鷹のような灰色の目と、左頬から耳にかけて斜めに走る傷跡が、幾分ものものしい、ただこゝとでない雰囲気を与えていた。何度も生と死のぎりぎりのふちを見てきたに違いない、深い鋭い目、研ぎすまされたような鋭利な顔だち、鍛えられた、しかし驚くほど俊敏に違いない身体は、年齢に逆らつて、無駄な肉などひとつもついていないように見える。

少佐はその人物をはじめて間近で見た。彼には、ほかの男のように浮ついたところがひとつもなかった。彼の目は、伯爵の上の敬意と愛情をこめて終始そつと注がれていた。伯爵もときおり、彼をそんな目で見返していた。目が合うと、ふたりは小さく微笑みあつた。

「さて、わたしはもう帰つて寝なければ」

エステン氏が立ち上がった。午後九時前だった。会場に来て、一時間ほどになる。招待された義務は果たしたと云えそうだった。少佐と一緒に戻ろうかと思つたが、一方でそれは伯爵を見捨てていくことのように思われてならず、結局はその場に残つた。

ぼんやりと会場を眺めていると、ドン・フィエルロが少佐のもとへやってくるのが見えた。右足をやや引きずっていたが、態度は実に堂々としていた。どつしりと落ち着いた感じが、いかに伯爵が「パパ」扱いしそうな、揺るぎない自信と慈悲深さを合わせ持っていそうな男だった。

「エーベルバッハ少佐ですね」

男はその鷹のような目でじつと少佐を見つめたまま、やや不慣れらしいドイツ語で確認してきた。

「突然声をかけて申し訳ない、わたしはフィエルロ、スペインではドン・フィエルロで通っている……」

「どうも、こいつは光栄だ」

少佐はスペイン語で返した。

「ご心配なく。スペイン語はガキのころから叩きこまれてますからな。家系上、いくらかそつちの血が混じつてゐるもんで……」
ドン・フィエルロは少佐のスペイン語にほつとしたようにかすかに笑つた。

「それはありがたい。ドイツに来ておいてなんだが、ドイツ語はどうも苦手だ。イタリア語やフランス語なら、それなりにできるんだが。伯爵からきみのことを、耳にたこができるほど聞かされていたのね……一度話をしてみたいものだ」と前から思つていたんだ」

少佐の横の椅子に腰を下ろすと、ドン・フィエルロはあたり

をひとわたり見渡した。

「伯爵がきみを招待したのか？ このパーティーに？」

相手につられて会場を見回しながら、少佐はうなずいた。

「たぶんそうでしょう。おれは招待状を受け取っただけだが」

「なにか意図があるのかな。きみが来て楽しいようなパーティーだとは思えないが」

「さあ。そいつはわかりませんな。そもそもあいつの意図なんて、おれにわかつたためしがあるのかどうか疑問だ」

ドン・フィエルロは会場を見回すのをやめ、少佐に向き直って、葉巻を取り出した。少佐は火をつけてやった。それから自分の煙草にも火をつけた。

「確かに、彼はときどきわかりにくいように見えるね」

ドン・フィエルロは聞き分けの悪い子どもに向けるような苦笑を、ちらりと伯爵へ向けた。

「ほんとうはとてもわかりやすい子なんだがね、彼は。ただ、素直に自分に従っているだけさ。求められる場所へ出向き、求められるものを与える。もちろん、自分の誇りや威厳を失うようなことは決してしないが」

伯爵は相変わらず男たちのあいだで笑っていた。楽しげに、声を上げて笑っていた。彼が満足そうにしていると、男たちも満足気だった。ある小柄な男が……エステン氏の紹介では自称コメディアンということだったが……ひどくこつけない顔を作

って、周囲を笑わせていた。伯爵は彼の肩にもたれて大笑いし、こぼれてしまった涙を指で拭いた……別の男が、彼にさっとハンカチを渡した。伯爵は礼を云い、それを受け取って、涙を拭いた。

「……伯爵から聞いているかな。わたしは彼の父上の友人で」

ドン・フィエルロが通りがかった給仕からブランドー入りのグラスを受け取って、先を続けた。

「父上を非常に尊敬していた。すばらしいひとだったよ、彼は。いまの伯爵のことは、五歳のころから知っている。小さいときから、聡明な、美しい子だった。あんな美しさを受け入れて自分のものにするには、繊細すぎる子だとわたしは思った。心配したよ。あんな繊細な子に対しては、周囲のちよつとしたからかいめいたものですら、取り返しのつかない深手を与えてしまうことになりかねないからね。先代の伯爵も同じ心配をしていたようだ」

先ほどおかしな顔を作っていた男が、今度は立ち上がって、へんてこな踊りのようなものをやりだした。みんな涙が出るほど笑った。伯爵が、その踊りを真似して踊りだした。するとあたりの男たちも乗ってきて、みんなで変な踊りをやりだした。室内音楽を担当していた楽団は、この出自不明のダンスに当惑したらしかった。が、すぐにリーダーらしい男が身振りをまじえて指示を出し、タンゴを演奏しだした。タンゴは、この妙な

踊りによくあつていた……それで、みんな今度はタンゴを踊りだした。男だけの、へんてこなタンゴを。伯爵は笑いながら踊っていた。小柄な男は乗りに乗って、いまや全身で情熱的な踊りを表現していた。

伯爵と男連中は、少なくとも非常に楽しそうだった。全員正装してはいるが、それでいて堅苦しくない、開放的な空気が確かに感じられた。エーベルバツハ少佐は、彼らに混ざってみたらどうなるだろう、とても思ったのか？ まさか、そんなはずはなかった。少佐はああいう連中とは別だからだ。エーベルバツハ少佐は、伯爵を真に愛しているものであつて、ほかに家庭を持つていたり、長続きしないその場限りの愛を幾度も捧げるようなものとは違うのだから。

……きみは愛は制限するものだと思つて、わたしは愛は拡張するものだと思つて……少佐はそのことを、ふいに思い出した。娼婦とそうでない女との根本的な違いはなにか？ あるいはそんなものが、存在するのか？ わからなかった。もしも伯爵のしていることが正しいなら……もしもこの光景が、いま見ているとおりに楽しく、大らかなものであるのなら……それは少佐のなにかを、根底から覆しかねないものだった。それはあまりにも危険な考えだった。危険で、とりとめなく、おそろしいものだった。

「そうなんだ、わたしの心配は杞憂だった」

ドン・フィエルロは広間のタンゴを横目に、顔をにやつかせながら云つた。

「実際には、伯爵は誰が想像していたよりも軽やかに、自分に課せられた試練を受け止め、乗り越えていった。彼は決してごまかさず、決して逃げなかった。その結果、あらゆるものを魔法にかけ、溶かしてしまう力を身につけたのさ……」

いまやタンゴの輪は、広間全体に広がっていた。みんな踊っていた。ある者は笑いながら、ある者はややおっかなびつくり、ある者は困惑しながら。踊りができないほど年をとつたものは、椅子の上で身体を揺すつていた。

いったい、伯爵の魔法とはなにか？ 彼の秘密はどこにあるのか？ それはどこからやつてくるのか？ 自分はそれを、不当に押しとどめようとしているというのか？ 誰のために？ なにを守るために？

「とはいえ、わたしはいつも万が一に備えている……」

ドン・フィエルロが真剣な話を続けるのは、もはや不可能に近かつた。というのも、いまやタンゴは非常に情熱的な局面にさしかかりつつあつたからだ。伯爵はいつたいいつ、ワルツだのタンゴだのの女役を習つたのだろう？ 彼はいつの間にか例の小柄な自称コメディアンと組になつて、広間を闊歩し、くると回転し、男の腕にしなだれかかつて踊っていた。彼の胸にはいつの間にか真赤なバラが挿してあつた。男たちは、もうほ

とんど自分の踊りをやめて、このカッブルに喝采を送っていた。曲の終わりに合わせてふたりがポーズを決めると、広間は盛大な拍手と称賛の叫び声に包まれた。小柄な男はびよこんと頭を下げ、伯爵を指して拍手を促した。伯爵も頭を下げ、それから笑いながらソファに戻った。

「窓を開ける」

と誰かが叫んだ。

「暑くって暑くってやりきれない」

実際、広間は男たちが動きまわったせいで熱気がこもっていた。すぐに給仕がふたり走って行って、カーテンを開き、フランス窓を開けた。寒々とした風がどつと入りこんできて、中は一気に寒くなった。

「すまんが、窓を開めてくれんか」

弱々しい老人の声が遠慮がちに云った。

「わしゃ寒くってやりきれん」

男たちがどつと笑った。広間の空気は完全にほぐれて、リラックスした、打ち解けたものになっていた。

「なんの話をしてたんだったかな」

ドン・フィエルロが苦笑いしながら云った。

「なんでしたかね」

少佐も笑ってごましかったが、できなかった。少佐はちつとも笑えなかった。おかしいどころか、いらいらして、腹を立

てていた。そしてこの広間で自分ひとりがいらいらしていることに、ますます腹を立てていた。まったく、くだらないパーティーだった！

それから少しして、ひとりの男が遅れてやってきた。年のころは五十そこそこだろうか、中肉中背で、黒みがかった焦げ茶の毛髪を丁寧な頭になでつけた、とりたてて特徴のない、どこにでもいそうな男だった。使用人に連れられて広間へやってきた男は、さつと中を一瞥し、その場の妙に打ち解けた、親密な空気を感取ったのか、眉をしかめてさつと顔を曇らせた。

彼の登場に気づいた男が歩み寄って、男を伯爵の前へ連れて行った。伯爵は彼に微笑みかけ、腕を広げて抱きしめた。男は身体をこわばらせ、居心地悪そうにもぞもぞした。すぐに身体を離し、男は伯爵に託びを入ればじめたようだった。

少佐はこの遅れてやってきた男が、やたらと目をきよろきよろさせ、落ちつかない様子でいるのが気になった。男は顔色が悪かった。なにか思いつめたような、張りつめた顔をしていた。

「あの男」

少佐はドン・フィエルロに云った。彼もその男を見ていて、うなずいた。

「あの男を知っているかね？ 知らない？ 彼はクレイグとい

って、イギリスの美術研究家なんだ。伯爵のあわれな追っかけのひとりだ。彼の論文に、伯爵が目を留めてね……ぜひお話を、というところから交流がはじまつたらしいんだが……」

遅れてきた男……クレイグは伯爵と少し会話をすると、すぐにそのそばを離れて、ソファの裏手側のテーブルに回った。給仕から飲み物を受け取ると、それをなめながら、伯爵の背中にちらちらと気障りな視線をあげせた。警戒しているような、なにかをおそれているような、見ている者を落ちつかない気持ちにさせる目つきだった。

「かわいそうに、伯爵にすつかりのぼせあがってしまったらしいんだよ」

クレイグは伯爵から視線をそらし、グラスの中の琥珀色の液体をしばらくじっと見つめた。それからまた伯爵を、警戒する小動物のようにちらちらと見やった。

「大学の研究室勤務の、ごく内気で平凡な男だったらしいが……遅い結婚をして、ひとり娘はまだ小さいらしい。ここへ来てもいたぐいの男ではないよ、本来は。伯爵は最初、一種のシヨック療法のつもりで招いたらしいがね。自分のいるべき場所を思い出して戻るように、とね。考えあぐねて、さんざんいろんなひとに意見を聞いて回ったうえで決断だったんだが、不幸なことに逆効果だったんだ。クレイグの……彼も芸術なんぞに関わっている人間だから、ひと倍粘着質な情念を抱えてい

るわけさ……その情念に火をつけてしまったんだ。あとはどうなるか、云わないでもわかるだろう。平凡で健全な生活の蔭に押しこまれ、隠されていたものが一気に噴き出してきた。それはクレイグに襲いかかり、彼の身を焼いた。彼はまだ火だるま状態だ。炎に包まれながら、地獄の坂を転がり落ちている。職を失い、妻子を失い……このたったの二年のあいだに！」

二年だって？ 少佐は心底驚いた。二年といえば、ほとんど伯爵と構築してきた年月にひとしかつた。それなのに、少佐はなにも知らなかった。伯爵は云うべきことではないと考えていたのか？ そんなはずはない。この手の問題を遠ざけておいて、いったい恋人である意味があるのか？ 彼は打ち明けるべきだった。エーベルバッハ少佐がいやしくも男、しかもそれなりの経験を持った男である以上、いくらでも手は打てたはずだ。それを自分でなしにほかの連中に聞いて回るとはどういうことなのか？

……ふいにあることに気がついて、少佐は血の気が引いた。伯爵は云わなかったのではなくて、云えなかったのではないのか？

伯爵が話そうにも、彼の口からほかの男の名前が飛び出すや、疑ってかかっていたのはエーベルバッハ少佐ではなかったか？ この二年のあいだ、エーベルバッハ少佐は伯爵の話をほんとうに聞いていたのか？ そしていま、こんなに重要な話を、少

佐は伯爵の口からでなく、他人の口から聞いている！

「クレイグはいまのところ、まだかろうじて紳士的と云える態度を保っている。伯爵が適当に泳がせているのですね。パーティーというパーティーには招待状を出して、呼んでやっている。クレイグはどのパーティーでもやつてくる。たとえイギリスの外でも、ヨーロッパの外でも。そして誰と近づきになるわけでもなく、ああしてじつと伯爵を見ている……一見、伯爵を避けているようにさえ見える態度を取りながらね。ときどき、どうやって手に入れたのかわからない美術品を伯爵のために持つてくることもある……わたしは、あの男はいつか投獄されるだろうと思っている。そうなれば一番いいんだが！」

少佐は煙草に火をつけ、急いで何口か吸いこんだ。昔から、煙草がじりじりと燃えて、灰になってゆくさまを見ると、不思議と気持ちが落ちつくような気がしたのだ。少佐は灰を灰皿へ落とし、クレイグを見やった。男はひとりきりでテーブルに座っていた。伯爵の背中しか見えない、周囲に誰もいないわびしい席に。そしてひとりで酒をなめ、伯爵の背中を見ていた。ほかの男たちと陽気にやっている伯爵を。決してそこに加わらず、ただじつと、暗い、うらめしそうな、物欲しそうな、陰鬱な目をして。

少佐は立て続けに二本吸った。それでもまだ、血の気が戻らない気がした。

「さつき話しかけていたことを思い出したよ。この連中ははおおむね、見たとおり陽気にやっている。でもわたしは一応警戒は怠らないんだ……伯爵に万が一のことがあると大変だからね。彼は見た目があだし、あの通り鷹揚だからね、望まないいろいろなものに巻きこまれやすい。彼は鷹揚であるが故に、その気もなしに、ひとの罪悪感を刺激してしまうんだよ。そして、罪悪感とは人間の薄暗い秘密の根底に横たわっている……わたしはまったく自分の意志で、監視役をしているんだ。ローマのロボロンテを知っているだろう。彼も似たようなものだ。別にこの連中のように、同盟を組んでやっているわけではないがね。伯爵を守るためとは云わない。そんなことは出すぎたことだし、彼はたいがいのこととは自分で行うことができる。わたしはただ、あまさず知っていて、彼が必要ときには話し相手になり、手を貸したいのさ」

ドン・フィエルロは哀れむような目でクレイグを見やり、首を振った。

午後十一時過ぎだった。クレイグが伯爵に話しかけた。伯爵の応対は自然で、このふたりのあいだにのつびきならぬ問題が横たわっているなどとは、とても思えないようなものだった。伯爵はクレイグをソファの、自分の横に座らせた。クレイグは

相変わずおどおどしたような、ぎこちない態度だった。会話のあいだ、彼は伯爵を見なかった。ふたりは少し話して、立ち上がり、伯爵がひとこと周りにことわって、連れ立って広間を出て入った。

「まづいんじゃないですかね」

少佐はふたりが出ていったドアを睨みながら云った。彼はもう半ば腰を浮かせていた。

「わからない。こんなところだなにかことを起こすほど、あのクレイグが大胆だとは思えないが……少し待ってみよう」

ドン・フィエルロは冷静だった。

五分経った。ふたりはまだ戻ってこなかった。広間の連中は間延びした話をだらだらと続けていた。少佐はドアを睨みつけたままだった。

十分が経った。広間は、あのくだけた、ほがらかで打ち解けた空気が、明らかにそわそわした、落ちつかない空気に取って代わられつつあった。誰もが、自分や相手の話にまじめに耳を傾けてはいなかった。彼らの注意は、ふたりの出ていったドアに釘づけにされて、そこから動くことができなくなっていた。しかし、そこに注意を払っていることを、かつ憂慮していることを、互いに打ち明けていいものかどうか、まだ迷っていた。

「……もう十分になるぞ」

少佐がなにげなく発したその声は、つぶやきだったにもかか

わらず、部屋じゅうに行き渡り、息苦しい突然の沈黙をもたらした。皆顔を見合わせていた。動き出しているものかどうか、意見を交換しあっているものかどうか、彼らはわからないでいた。その沈黙が、並ならぬ不安と動揺を物語っていた。

少佐は立ち上がった。椅子ががたんと音を立て、それが広間にこえました。次の瞬間には、少佐はもう大股で広間を横切っていた。広間を抜けると、すぐ後ろからドン・フィエルロが音もなく追いついてきた。給仕のひとりがあわてて駆け寄ってきた。

「おふたりは、二階の左端のお部屋に……ふたりきりでお話したいと申されたものですから……あの……」

この給仕は少佐のただならぬようすを見て、責任を感じたらしかった。彼の顔はやや青ざめており、口調はしどろしどろもどろになった。少佐は給仕を放置して階段を駆け上がっていた。ドン・フィエルロがあとに続いた。階段の下では、大勢の男たちが、ふたりの男を見上げながら、どうすべきか迷っていた。が、彼らもすぐに意を決したように、あとに続いた……といきたいところだったが、全員で我先にと駆け出したために、みんなしてつかえてしまった。彼らは口々に罵声や非難めいた声を上げた。

部屋の前で、ふたりの男は立ち止まり、目を見合わせた。ドン・フィエルロがうなずき、少佐はだしぬけにドアノブに手を

かけた。ノブはすんなり回った。少佐はノックもなしに扉を開いた。

客室は、いかにも心地よさそうなソファや机、それに大きなベッドで占められていた。そのベッドの上で、ふたりの男が組み合っていた。クレイグは、伯爵を組み抱いて首に手をかけた状態だったが、ドアが開くと驚いて振り向き、らんらんと光る目をかっと見開いた、おぞましい表情を見せた。見開かれすぎたために、目が飛び出しているように見えた。その下にできたくつきりした隈が、ぎらぎらした眼光と対蹠をなし、青ざめて黒みを帯びた肌と、かわいた唇は、棺に横たわった連中を思い起こさせた。一瞬のことだったが、その地獄の亡者もかくやとばかりの顔は、鮮烈な印象を残した。クレイグはふたりの男を見とめると、あわてて伯爵から手を離し、ベッドから飛び降りた。伯爵はベッドに寝転がったまま、ゆっくりと首を回し、ドアのほうへ視線を移した。少佐と目が合うと、彼は誘うような微笑を浮かべ……そこがあたかも今夜のふたりの宿であるかのように……それからそと身体を起こした。ベッドに座り、身をかめて床に落ちていたガウンを拾い、肩にかけなおした。ようやくつかえがとれた大勢の男たちがどやどやとやってきて、狭い部屋の入り口付近を占拠した。

「みなさん、どうしたんです？　そんなにお揃いで」

伯爵がベッドから立ち上がって、首を傾けながら云った。べ

ッドの向こう側で、クレイグは身体を硬くし、青ざめた顔をして、伯爵とドアのまわりのひとりだかりとを、落ちつきなく交互に見やっていた。

「きみが戻らないから心配したんだ」

例のぶくぶく太った今宵の主催、ゲルプマンが云った。伯爵は無邪気な笑い声をあげた。

「あはっ、ほんとですか？　クレイグさんが、とても美しい細密画をいくつか見せてくれていたんです。夢中になっちゃって、ふたりとも時間を忘れちゃったんですね。心配かけてごめんなさい。でも、なんでもないんです」

伯爵はにっこり微笑んだ。甘えるような声だったが、そこにはなにか、有無を云わせぬ響きがあった。彼がつかつかとドアに向かって歩いてくると、男たちは波のようにうごめいて、彼のために道をあけた。ドアを開くぐる直前、伯爵は少佐をまっすぐに見つめ、すぐに視線を逸らし、ドン・フィエルロに微笑みかけると、廊下を進み、階段を降りていった。

残されたクレイグが、ぶるぶると震えだした。彼はゆっくりとベッドに腰を下ろすと、頭を抱え、身体を丸めて、動かなくなった。彼の足下に、なにか輝くものが落ちていた。伯爵のすずらんのブローチだった。少佐は迷ったが、それを拾うために部屋の中に入ってしまった。少佐がすぐ足下にかがみこみ、ブローチを拾い上げても、クレイグは微動だにしなかった。

「われわれも戻ろう」

ドン・フィエルロがクレイグを鋭く見つめたまま云った。

「あの男は、そつとしておいたほうがいい」

少佐は相変わらずベッドにうずくまって身動きもしない男を一瞥して、部屋を出た。ドン・フィエルロが静かにドアを閉めた。

ふたりは階段を降りていった。少佐は疲れ、うんざりしていた。怒りというより倦怠が、なにかの衝動というより沈鬱さが、彼を包んでいた。伯爵はたいがいのは自分でする……その通りだった。彼はみごとに窮地を脱してしまった。あんなやり方をされては、クレイグにとっては入る穴すら見つからないだろう。慈悲深いやり方だった。そしてそれゆえに、見ようによってはひどく残酷なやり方だった。クレイグは打ちのめされているに違いなかった。自分で自分を滅ぼしたいと願っているに違いなかった。

ポケットの中で、すずらのブローチが、ときおりからかうように少佐の身体に当たり、存在を主張していた。

少佐もまた、こっぴどく打ちのめされていた。

カーンからの電話がきたのは、パーティーの翌朝、エステン氏との朝の行事を終えて部屋に戻った直後だった。

「おはよう、エーベルバッハ少佐」

耳障りな高い声でカーンは云った。少佐はその声で、彼のそびえ立つ高慢な鼻を思い起こした。それから彼の、神経質に頭や顎をかきむしるしぐさを思い出した。カーンのやることはいつも傲慢で荒つぽかったが、その実驚くほど神経質な男だ。それが露呈するたび、少佐はなぜか彼をあわれに思うのだった。カーンのような男は、いつまでたっても自分自身になることができないだろう。

「元気かね？ 先ほどボンへ電話したのだが、いまはベルリンのグランドホテルにいると聞いてね……いいところに泊まっているじゃないか！ さすがはNATO将校さまだ」

「なんならきみも転職したらどうかね？」

少佐は云い、煙草に火をつけた。カーンはわざとらしく、そしていささか神経質そうに笑った。

「ぜひそうしたいもんだ。さて、折り入ってきみに話があるのだが……きみがいま日々よろしくやっているあのお年寄りの持ち物についてだがね」

「BNDも動いていたとは知らなかったよ。なぜ早く云ってくれなかったんだ。そうしたらきみに任せて、おれはほかの仕事ができたのに」

カーンはむつとしたようだった。彼は一瞬ことばにつまったが、すぐにこんなことで目くじらを立てては品位に関わるとばかり、声を和らげて、

「われわれはいい加減、少し協力というものを学んだほうがいいかもしれないな、ええ？」

とひとがよさそうに云った。

「おれもそう思う」

少佐はベッドに転がった。必然的に、天井が見えた。

「話を聞かせてくれ」

カーンは少佐に会話の主導権を握られそうになって、またむつとしたようだった。そのため、なおしばらく無関係な冗談をいくつかばらまくことになった。

「で、本題だが」

ようやくカーンがそう云ったときには、少佐はもうあくびをしていた。

「彼の資料がわれわれの手元にあることは、もう知っているだろうね？」

「もちろんだ。きみたちがうらやましいよ。おれが同じことをやったら、上からこっぴどくしかられた上に、最悪軍法会議に

かけられたろうからな……おれもBNDに転職するべきか迷つとる」

カーンはこれを皮肉として受けたようだが、その意味はおそらく半分ほどしか伝わっていないに違いなかった。

「きみの転職の相談は後日聞くとしよう。さて、どうしたものかな？ この資料をわたしが提出してもいいんだが、わたしはきみの面子を心配しているんだ……」

黙れくそばか野郎。少佐は心の中で毒づいた。

「きみが毎日いかにその老人に対して誠意を見せ、努力を続けているかは、わたしもよくわかつているつもりなんだ。であるからして、わたしは長年のライバルであるきみに敬意を表する意味もこめて、チャンスを与えたい」

「ほー、そうかね、そりゃご親切に」

少佐のこの返事は、あきらかに彼の氣に入らなかった。彼はおそらく、少佐が怒り狂ったり、いまいちそうに条件を云え、とか云うことを期待していた。が、カーンはまたうまく取り繕った。

「あまりうれしきそうだな？」

「いいや、おれは感情表現が下手なんだ。そのせいでいつも失敗する。心理学の先生によると、極度の恥ずかしがり屋なんだとき。男には割とよくいるタイプらしいがね」

「そうか、それは知らなかったよ。それで、わたしの提案を聞

いてみる気はあるかね？」

「もちろんだ、続けてくれ」

少佐は短くなった煙草を灰皿に押しつけた。そしてすぐにまた新しいのに手を出した。

「わたしの提案はこうだ……」

カーンはここでもったいぶった。受話器を通して、彼が葉巻……カーンは生意気に葉巻を吸う……に火をつけたのが聞こえた。

「わたしはいま、手元にきみが欲しがっている資料を持っている。これはもちろん、わたしにしてもこのまま自分のところに置いておきたいものだ。これを提出することは、政府に貢献することになるからね。それから、わたしはここに、例の資料とはまた別に、ある写真を持っている……」

少佐は反射的に受話器に目をやった。まだ少佐自身には認識できない危険を本能が先に察知したときのように、全身の神経がかすかにざわめきだした。

「こちらのほうは、わたしにはあまり意味がないんだが。でもきみには、大きな意味があるだろうな。わたしはこれを手に入れたしまったので、胸を痛めているんだよ。できればわたしはきみを傷つけたりはしたくないからね。われわれは友人どうしだ、そうだろう？」

「もちろんそうだな」

少佐は云い、ことさらに灰皿に灰を落とした。

「内容は電話では云えない。会って直接見てもらうこととしよう。きみに提案したいことというのはこうなんだ。まず、われわれはふたりきりで、どこかで落ち合おう。なんなら、きみのホテルまで出向いてもいい。あるいは、別の場所でもいいが。わたしは例の資料と、いま手元にある写真とを持参する。ネガつきでね。きみはもちろん手ぶらでいいんだ。わたしはきみに写真を見せる。その上で、きみに選んでもらいたいんだよ。どちらかひとつをね……両方をきみに差し出すほど、わたしはおひとよしではないんだ」

少佐の頭はめまぐるしく回転していた。写真？ いったいなんの写真なのか？ それは資料と同等の取引材料になるほど価値のあるものなのか？ どちらかを選べだ？ そうきたか、このくそったれめ。

少佐はほんの数秒考えた。が、考えてもどうにもしようのないものであることはわかっていた。こうなつては、できるだけ自分に有利なものを、自分で引き出してくるしかない。

「わかった。話はよくわかった。おれには、なにも決める権利がないらしいな」

「そうでもないさ。たとえば、会合場所や時間などは、わたしはきみの都合に合わせるよ」

自分の持ち物に、カーンはよほど自信を持っているらしい。

カーンという男はそういうやつだった。ものごとがはつきりしないうちは滅法焦つてことをしかけてくるくせに、自分が勝てそうな兆しが見えてくると、すぐに寛大になり、気前よくなるのだった。彼はそれで何度も泣きを見てきた。が、それが自分の失敗の原因だとは、いまだ思い至らぬらしかった。

「そんなら、面倒だがグランドホテルまで来てくれんかね？ 日時については、おれにも特に希望はないが……明日の午後ではどうかね？ 三時に、ホテルのラウンジで。このこのコーヒーはばかに高いが高いいだけのことはあるんだ。飲んだことは？ ならぜひおれに紹介させてくれ……」

カーンは承知し、電話を切った。少佐はしばらくぼんやり煙草をふかし、それから部下Aへ電話を入れた。

「おれだ。ついにカーンから連絡があつたぞ。明日の午後三時にご面会だ」

少佐には、Aが真剣な表情をこしらえるのが、受話器の向こうからでもわかるようだった。

「やつは資料を渡してもいいと云つたのですか？」

Aは慎重だった。

「正確には、そうは云つとらん。ただ、選択肢の中に入つとるそうだ」

少佐はカーンからの提案をくり返した。Aはひどく考えこんでしまったらしかった。受話器の向こうから、沈黙が押し寄せ

てきた。少佐は沈黙のうちに、Aがなにを考えているのか手に入るようにわかった。Aがそうであるように、少佐もAの考える道筋が、黙っていても見えるのだった。写真の持つ意味、それが示すかもしれないもの、それが少佐に与えるかもしれない動揺……Aは長年の習慣から、自分の考えを追いかけ前にな、まず少佐の感情や考えをたどることを優先させるようになっていた。そして彼はほぼ正確に、暗闇を手探りでかき分け、少佐のいまいるところまでやってくる事ができた。少佐はそのあいだ、ただ待つなり、ほかのことに気を取られているなりすればよかった。結果的に、Aはごくまじめにこう訊ねただけだった。

「カーンがいつたいたなんの写真を手に入れたのか、さぐれるだけさぐってみましょうか？」

少佐はにやりと笑った。

「まあ、おまえとしてはそれを訊かんわけにはいかんだろうな。まあ、そうだな、当たれるなら当たってみてくれ。たぶんわからんと思うがね。DとEは暇かね？ 明日こつちへよこしてくれないか？ ただし、ホテルの前で待機しているだけにしろ。中には入るな。一応、向こうの提案ではわれわれふたりきりで、ということになつとるからな。向こうが守ると思えんが、だからといってこつちが破る理由にはならん」

「わかりました。それでは……少佐、Bがさつきからやた

らと存在を主張してくるんですが、どうしたらいいですか？」

派手なアフロヘアを左右に振って、肉づきのいい顔に満面の笑みをたたえるBのアピール方法を思い起こして、少佐は笑いをこらえるのに苦労した。

「知らんよ。好きにさせればいいだろう」

少佐は冷たく云いはなつた。

「ではカウント外で好きにさせます」

Aも辛辣だった。カウント外ってなんだよ、というBの不満げな声が少佐の耳にも届いた。次の連絡を約束して、少佐は受話器を置いた。

ソファに移動し、しばらく座って考えこんでから、少佐はふいに部屋を出た。

あいにくのどんよりした曇り空だったが、パリ広場やブランドブルク門は相変わらず観光客に囲まれ、にぎやかだった。金を持たないバックパッカーたち、いくらか余裕のありそうな中年や老年夫婦、家族連れ、どこの国でも似たり寄つたりの、若さの勢いをまき散らす騒がしい学生ども。そして歴史ある門の周囲は、そういった観光客たちの財布の紐をゆるめさせる努力に余念がない。おかげで、どこの観光地も似たようなものになつてしまふ。広場に軒を広げる出店、どこから集まつてく

る大道芸人たち、土産物屋、博物館や美術館、近代的なホテル、しゃれたレストラン。五、六人の若い学生集団がいて、ふざけあいながら記念撮影に熱中していた。女子学生の甲高い声があたりに響き、男子学生がそれをからかって、笑い声はさらに大きくなった。彼らはさまざまなポーズを取っていた……年輩のひとつが見たら、眉をしかめただろう。

女神ヴィクトリアはこうした騒ぎのさなか、相変わらず威厳をたたえて、門の上から馬車で走りださんとしていた。彼女は今日も静かな、深い青銅色をまとっていた。鉛色の空の下で、ひとり杖を掲げて。彼女を取り囲む世界がどうであれ、あくまで名譽を守り通すように。誰ひとり、彼女の気持ちを理解することはできない。彼女に同情を寄せ、手をさしのべる者はない。そうされたところで、誇り高い女神は拒絶したろう。曇天の下で、彼女は耐え抜いているようだった。広場の喧噪、俗な観光客、それを相手取った商売。

少佐はもうひとりの女神に会うために、六月十七日通りの遊歩道を直進した。この日は少し風があった。少佐の肩まで伸びた髪は、風にあおられて遠慮がちに舞い上がった。床屋に行かなければならん。少佐は考えた。彼はやたらめつたらな床屋へ行くわけにいかなかった。家柄を持つものの宿命で、彼には代々の行きつけの床屋というものがあつた。その店主は、自分の店の看板を誇りにしており、いまだに紹介のない新規の客は断

じて受け入れなかった。そして、自分の客が自分以外の散髪屋に身を任せたとを知ると、まるで不義でも働かれたかのようを感じ、その偉大な職業的誇りに傷がつくのだつた。おかげで、毎日ボンにしているわけではない少佐の髪は、伸び放題に伸びるのだ。伯爵が切らないでくれなどと云うものだから、昨今ではますます遠慮なく伸びてしまっている。

少佐は葉の枯れ落ちた裸の木々に沿って歩き、戦勝記念塔にたどりつくと、塔の上の女神に挨拶を送つた。女神は濁つた空を背負つて、黄金に輝いていた。憂いを帯びた顔を、まっすぐに前へ向けて。今日もやはり、彼女は飛び立たない。舞い降りたきり、動かないでいる。わたしはここにいて、と彼女は語りかけているように思われる。あらゆる戦いに疲れれた者たちに向かつて。勝利はここにある。常に、この場所にある。彼女は過去の勝利をたたえているのではない。いま戦っている者、いま戦いを挑みつつある者、これから戦う者のために、ここにいるのではないか？ 地上においてやむことのない、あらゆる種類の戦いのために。

ふいに、誰かがイタリア語で歌い出した。若い男だつた。大声ではなかったが、実に通りのいいテノールだったので、ロータリーの雑踏の中でもよく聞こえた。歌っているのはラブソングらしく、彼女への思いのたけをぶつけたものらしかった。男の横には目下その歌を捧げられている若い女性がいて、口元を

手で覆ってうつむき、笑っていた。少佐は苦笑した。塔の周囲でレリーフを見たり、ぶらぶらしていた観光客たちも、歌に気がついて笑ったりしていた。カップルは初々しかった。あんなふうに、若さにまかせてできる恋愛というのは、あやういけれども貴重なものだ。女神の下で愛を叫べば、それはもしかすると偉大な愛の勝利の雄叫びに変わるかもしれない。女神の御心になうほど誇り高くあれば。

少佐はその場をあとにした。

カーンとの面会を控えた朝、お定まりのエステン氏との朝食の席で、少佐は今日の午後からの会談について話し合った。

「迷惑をおかけしますな」

エステン氏はすまなそうに云った。

「まったく、こんなやつかいなことになるのなら、いつそのこと、あなたがおっしゃるように焼き捨ててしまえばよかったのかもしれない。とつくの昔に……でも、それはできなかったのですよ」

エステン氏はいつものようにのんびりとゆで卵の殻をむいていたが、その仕事が終わると、丸眼鏡を持ち上げてきつちり鼻の上に乗せてから、食べはじめた。

「わたしは昔の資料を見返すことはしませんでした」

いまや、このふたりのあいだでは、資料の話題はそのほかの話題と同じように、わだかまりなく口にするのできるものになっていた。これは少なくとも、カーンの仕事もたらした利点と云えるかもしれない。

「むろん、その欲求をときどき強く感じました。ときには大変強く。自分がなにをし、どんなものを築き上げてきたのか、なにか具体的なものをもって確認したい衝動に駆られて、どうに

もたまらなくなることがあった。でもわたしは、そのたびにそれを厳しくいましてきました。資料を銀行の金庫へ預けたのも、その対策のひとつだった」

エステン氏は今度は、ふたつ目のゆで卵の殻始末にとりかかった。彼は決して一度に殻をむくというようなことをしなかった。ひとつ片づけてから、もうひとつにとりかかる。わかっている、そういうふうにはできない人間もいる。

「その衝動は強いものだ。でも、それに身を任せてしまつたらおしまいだという気がした。過去の中へ引きずられていつて、もう二度といま現在に戻ってくるのがでなくなつてしまふのではないかという、非常に大きな不安、予感めいた不安があった……」

一瞬、彼の灰色の目を、ぎらついた光がよぎった。

「わたしはもう十分過去に生きている人間です。わたしのすべては古めかしく、ほこりにまみれ、蜘蛛の巣や、得体の知れない虫やなにかがそこかしこにうごめいている。わたしの血は、長く置かれすぎて熟成を通り越したワインみたいなもので……地下のカビ臭い空間に、厚くつもったほこりにまみれて置かれている、あれです……あなたの家にもあるはずだ……古い城や屋敷には必ずある……」

彼の殻むき作業は実に緩慢だった。殻の裏にくつついた皮ごと外せばべろりとはがれてくるのに、ちまちまと殻だけを碎い

たりしている。

「自分の過去が、自分の中で肥大化してゆくのがおそろしかったのです。わたしは表へ出て注目を浴び、一身に賞賛を受けるたぐいの人間にはなれません。それを享受できる人間には、また別の才能が必要です。そのことは自分でもよくわかっているつもりです。だから、わたしは進んで裏方をやってきた。うまくやってきたつもりだった。自慢じゃないが、わたしは古い師ばりに先のことを見通せるんですよ。昔は一種の神通力かと思うことがあります。自分の思い描いたことが、必ず現実になると知っていました。ですから、いずれ必ずわたしのしたことが役に立つ日が来ると、確信を持っていました。それで十分だと思っていた。誰にも評価されなくても、わたし自身のうちにある確信と、名誉と誇りとで、十分であるはずだと思っていた」

氏の灰色の、ふちがやや青みがかった目は、暗く吸いこまれそうな力を秘めて、じつとのゆで卵の上に注がれていた。否、それは卵を見ているのではなかった。彼は自分を見ていた。自分の内面にうごめくものを見ていた。

「引退してからのこの約二十年というもの、わたしは主として自分と戦ってきた。自分の仕事や能力に対する誇りや、自信だけでは満たされないものと。本来なら、人間は自分の誇りだけで自足していてもいいはずだ。他人が知らなくとも、神はご存

じなのだから。しかし、それだけでは、ひとは決して満足しないのだ……わかりますか、しんと静まり返った夜、もう眠ろうと思いベッドにもぐりこむ。しかしなかなか寝つけない。シーツの上でもぞもぞしているうちに、いろいろな過去のことが思い出され、鮮やかに目の前に蘇ってくる。過去に受けた栄光、名誉、大きな傷み、屈辱、後悔、憐憫、こんなはずでなかったという思い。無理解と手ひどい仕打ち、礼儀を欠いたふるまい。わたしは用済みとばかり放り出された。そんな扱いをされる覚えはなかった……そうした思いが、わたしに洪水のように襲いかかってくる。わたしは負けたくなかった。その思いをまとった悪魔にだけは。それはわたしの死を意味しましたから」

エステン氏はゆで卵から、自分の内面の深淵から顔を上げ、少佐をまつすぐに見つめてきた。

「……エーベルバッハ少佐、きみはどうだろう？ きみこそ、決して表に出てはならない存在だ。いかな偉業をなしとげたとしても。何度危機を救ったとしても。誰もきみのことなど考えない。きみはすべきことをしたまてだと、ひとびとは考える。そうして忘れていく。引退して何年かたてば、もう誰もきみのことなど覚えていない……」

少佐は彼の灰色の目を見た。そこにある暗く深い場所を覗きこんだ。その小さな、暗い空間に、少佐の姿が確かに写りこんでいた。いつたい、そこに写っているのが自分でないと、誰が

云えるのか？ 彼が語っているのが自分のことではないと、誰が云えよう？ 目の前の小さな、年とった、しかし偉大な男がもてあましているものが、自分にはないと誰が云えよう？ あらゆる能力は、いつも隙を連れてくる。あらゆる才能は、悪魔をともなつて人間の中に入ってくる。少佐は知っている。自分がフランスのとれた人間だなどと、誰が豪語できるものか。自分は自足しており、ほかのものは必要ないなどと、どんな聖者が云えるものか？

エステン氏はため息とともに少佐から目をそらした。彼はすでに自身を取り戻していた。その姿は、もうあの穏やかな、満ち足りたひとりの隠居老人にすぎなかった。彼はつかの間開いた扉をふたたび閉じた。しかし、扉からあふれ出たものは、まだあたりに濃い影を落とし、その叫びがこだまし続いていた。

「……そいつがいつおれの首に噛みついてくるのか、おれにはわからない」

少佐はのろのろとふところに入った煙草の箱に手を伸ばした。一本引きずり出し、しばらく葉を包む真っ白い紙を眺めて、口にくわえ、火をつけた。煙がよたよたと立ちのぼった。

「おれにわかるのは、いまはまだ襲撃を受けていないということだけです。ときどき、おれもそいつの気配を感じますよ。後ろから、気配を殺して近づいてくるのがね。でもいまは黙殺できている。いまは。これから先のことはわかりません。おれは

自分がなんのためにこんな仕事をしているのか、立ち止まって考えたことがないんだ。別に金のためじゃない。金なんぞ、先祖代々のものから適当に湧きだしてくる。家柄の義務なのか？ そうかもしれない。あるいは、親父やじいさんやそのまたじいさんや、代々の男たちがみんな軍人だったからなのか。家名の誇りだとか、国への貢献だとか、勝利への渴望だとかのために、進んで身を犠牲にしてきた血が、おれにも流れているのか……おれはそのあたりで考えるのをやめるんです。目の前に、ぼんやり霧がかかってくるのが見える。もしかしたら、忙殺される日々から解放されて暇ができたとき、そいつはいっせいにおれに襲いかかってくるのかもしれない」

エステン氏は目を閉じて、なにかを確かめるように何度もうなずいた。

ふたりは静かに朝食を取り終え、席を立ち、いつものようにサロンへ出ていって、新聞を読んで過ごした。少佐はエステン氏が、か弱い女子どものように、いまや自分にすべてを任せているのを感じた。

午前十時過ぎ……少佐が部屋へ戻って数分とたっていないかつた……部屋の電話が鳴った。

「やってくれたな、エーベルバッハ少佐」

というのがカーンの第一声だった。彼の声は抑えきれない怒りに震えていた。

「なんの話だね？」

少佐はやや困惑して訊ねた。部下のひとりがないかやらかしたのか？　だがそれなら、先に部下の方から報告があつてしかるべきだ。

「なんの話だと？　お望みどおり、今日の会見は中止だ。さぞいい気分だろうな。結局、いつもきみが勝利するわけだ。華々しく、冷静に、スマートに！　だがいいか、わたしは決して忘れないぞ、今回のことは。これまでのことだって、なにひとつ忘れていない。自分と部下の首に、いつも注意しておくんだな。それからきみの大事な、あの泥棒の首にもだ、気色の悪いホモ野郎め！」

電話は切れた。ごく冷静にいつて、カーンの最後の批判のことは的を射ていた。ある種の異性愛者は、伯爵が男だとわかつた瞬間に本能的な拒絶反応を示す。これはその典型的な反応のひとつだ。

少佐はなにか考え深いものを感じながら、一方でひどく困惑しており、手がかりを求めて部下Aに電話をした。

「おはようございます、少佐」

Aにはなんら変わったところはなさそうだった。

「今日の午後三時ですね」

「その件なんだがね、Aくん。カーンのやつが、たつたいまひどく取り乱して電話してきた。彼の意見では、会見は中止で、勝つたのはおれだそうだ。やつは、おれときみたち部下と伯爵に向かつて、首に気をつけろと……」

少佐はふいに、とんでもない可能性……否、ほとんど事実といてもいいだろう……に気がついて、硬直した。全身を巡る血が、瞬時に凍りつくのがわかった。カーンは、少佐と、その部下と、伯爵に向かつて、首に気をつけろと云つたのだ。少佐とその部下だけでなく、伯爵にも。

「少佐？　どうなさいましたか？　やつはいつたなんの話を……」

「A、部下DとE、それからおまけのBに、今日の会見は中止になつたから、一日ベルリンで遊んでいいと伝えてくれ。ただし、どこにいるつもりかだけはおまえが把握しておいてくれ。おれはちよつと確認したいことがある」

Aはまだ困惑しているに違ひなかつたが、それを相手に悟らせるような人間ではなかつたし、また、少佐が話さないことについてはずつたに質問をしなかつた。

「わかりました、少佐」

そのAの控えめな、あくまで上官に従順な態度が、ときおりかのエーベルバッハ少佐をして妙に打ち明け話したい気持ちにさせた。今回も、少佐は自分の考え……確信……をあやうく

口にしかけた。が、結局は思いとどまった。

「また連絡する。腑に落ちんだらうが、しばらく我慢してくれ。

たぶん、資料は安全だ。エステンじいさんに返せると思う。あるいは、おれが持ち帰ることになるか。この件に関しては、とにかくおれに預けておいてくれ。おまえらは自分の仕事をするんだ……それからGに、パリにいるからって真つ昼間に三時間も美容院にいるんじゃない、仕事をさぼるなばか者と云え……」

少佐は受話器を置き、すぐさま部屋を出て行きかけて、急いと思いとどまり、やや頼りない足取りでバスルームの前まで戻ってきた。ドアを開けると、真正面に洗面台があつて、大きな鏡が取りつけられている。いま、鏡には、ドアに手をかけ、やや緊張した、こわばった顔をしたエーベルバツハ少佐が映っていた。少佐の顔には幾分疲れの色が見えた。そして、これからはじまるであろうことに対して感じている不安と期待と興奮とが、少佐の目の奥にごたまぜになつて身を潜めていた。彼らは用心深く待っていた。ここぞというときになるまで、辛抱強く、待つことそのものによつてもたらされる興奮とともに、じつと縮こまつて待ち続けるのだ。きみの目には、きみのすべてが宿っている、と伯爵がいつだか云ったことがある……きみのそのグリーングレーの瞳、光の加減で、ガラスの破片でも散りばめたように見えることがある。きみのやさしさ、怒り、やるせなさ、同情、狂気、危険で、美しい目……

少佐は鏡の中の自分を見つめ続けた。ゆっくりと鏡へ近づいて行き、すぐ目の前に自分の顔があるところまで行くと、立ち止まつて、またしばらく鏡を見つめた。少佐と鏡の中の少佐は、静かな敵意を持った男どうしのようににらみ合った。それから少佐は出し抜けに微笑した。鏡の向こうの少佐も微笑を返した。踏ん張れよ、クラウス。少佐は自分をそう励ましてから、くると向きをかねて、バスルームから、ついで部屋から出ていった。

伯爵の部屋の前に立つのははじめてだった。最上階の角部屋のスイートルームで、左隣の部屋にはエステン氏がいるはずだった。少佐は一瞬、そのエステン氏の部屋へ視線を投じたが、すぐにもとへ戻して、伯爵の部屋のドアを見つめた。ドアは閉じていた。しかし、少佐がベルを鳴らし、懇願すれば、開かれる可能性のあるドアだった。ほんとうなら、このドアは少佐のためにはいつも開いている。それを閉じ、鍵をかけるように仕向けたのは少佐自身だった。

彼はドアの横についている小さなボタンを押した。ブーッと鈍い音が部屋に響くのが聞こえた。一拍おいて、次は三度続けて鳴らす。それがふたりのあいたのベルの鳴らし方だった。はじめは少佐がふざけてやったのだが、いつの間にかそれが独自の地位を確立し、独自の意味を持つに至った。これを聞くと、伯爵はばたたと大急ぎで部屋を横切ってやってきて、勢いよく扉を開け、少佐に抱きついてくる。万が一のときのために、なんらかの異変があるときには、三度のベルのあとにもう一度ベルを鳴らすこと、という取り決めまでしてあった。そうしなければ、少佐が安心できなかった。

伯爵は出てこなかった。少佐はもう一度同じやり方をくり返した。それでも反応はなかった。少佐はそつとドアノブを回してみた。ドアはすんなりと開いた。

少佐は中へ入る前に、ためらった。部屋の先にあるだろう空気、伯爵がもたらした満ち、広げる空気は、ときおり少佐を圧倒し、畏怖に近いものを感じさせた。少佐は幾度もためらいがちにそれに飲みこまれてきた。それはやんわりと優しく少佐を包み、誘い出し、連れ去り、運んでいった。笑い、ざわめきながら少佐の背中を押し、伯爵のもとへ押しやって、舞い上がり、いつまでもくすくす笑いを続けている。そういう霊気のようなものを、少佐はよく感じた。それは空間に飛び火した伯爵の遊び心みたいなものだった。あるいは、愛に使者が……クビドのような使者がいるとしたら、それなのかもしれない。

少佐の逡巡はほんの数秒だった。彼は覚悟を決めた。ぐっと力をこめてドアを大きく開くと、目前に優雅な居間が姿を表した。たつぷりと日差しを取りこんでいる大きな窓、美しいひだを描く真っ白なレースのカーテンと、深紅の重々しいカーテン、その下に広がっているソファとテーブルのセット、書き物机、くり返しの花壺モチーフで飾られた、象牙色の美しい壁紙。部屋の中には、ほのかにバラの香りがただよっていた。白と紅色のバラが大きな花瓶に生けられて、優美な脚の台に置かれ、続きの部屋へ通じるドアの左右にしつらえてあった。少佐は花瓶

のところへ歩いていって、鼻先を近づけ、それから紅色のバラを一本引き抜いた。指先でくるくると回してもてあそび、腹を決めて、目の前の、おそらく寝室に通じるドアに手をかけた。

部屋の中央に、天蓋つきの大きなベッドがあった。天蓋からぶら下がるカーテンは左右に開いていて、伯爵がベッドの真ん中に目を閉じて横たわっているのが見えた。白いサテンのガウンを着ていた。巻き毛が枕からはみ出し、純白のシーツの上に広がっていた。バラの花びらがベッドのあちこちに散っていた。伯爵がむしって、散らかしたものであった。ベッドの下に、無惨に花を奪われた茎と葉がいくつか転がっていた。枕元では、伯爵の相棒のティベアが、心配そうに友だちを見守っていた。少佐はベッドの先のフランス窓に目を転じた。バルコニーに通じる窓は少し開いていて、カーテンが頼りない冬の日差しを浴びながらかすかに揺れていた。部屋の中は寒かった。少佐は顔をしかめ、窓を開めにかかった。

「いいんだ、そのままに……」

伯爵の声がした。少佐は振り返った。伯爵は目を開け、首を回して、どこかぼんやりした目で少佐を見ていた。

「すきま風がくる」

少佐はドイツ人らしいことを云った。

「凍え死にたいのか？」

伯爵は微笑し、もうなにも云わなかった。少佐は窓を閉めた。

そうして、窓にもたれかかって立った。少佐はふたたび、幾分持て余したバラの花をくるくるやった。伯爵がそれに目を留め、微笑を浮かべた。少佐は枕元へ行つて、差し出された彼の美しい手にそれを握らせた。伯爵の顔はやや青白かったが、少佐がバラを差し出すと、頬にかすかな赤みが戻った。伯爵はバラに鼻先を近づけ、微笑み、胸に抱いた。

「具合が悪いのか」

少佐は口調を和らげて云った。

「うん……」

伯爵は目を閉じた。沈黙が流れた。

「寒いよ」

伯爵がつぶやいた。少佐はクローゼットのところまで歩いて行つて、中から暖かそうなウールのガウンを取り出し、持ってきた。少佐がベッドへ近づくと、伯爵が物憂そうに首を曲げ、少佐を見上げた。

「ほれ」

少佐は云った。伯爵は首を振ったが、少佐はかまわず彼にガウンを押しつけた。伯爵はうらめしそうに、力なく少佐を見つめた。少佐は居間から椅子を引っ張ってきて、枕元に設置し、腰を下ろした。伯爵はおとなしくガウンにくるまって、丸くなっていた。手にはバラを握ったままだった。

「……なんだってあんなことしたんだ」

少佐は静かに云った。伯爵は顔色を変えず、身体も動かさなかった。

「……違うな、理由なら、おれはたぶんとつくにわかつとるんだ」

伯爵が少佐を見上げた。少佐は肩をすくめた。

「ひとが見たら、たぶんほとんどのやつは、おまえらは大ばかだ、と云うだろうな……資料は、どこにある？」

伯爵はかすかに微笑し、すぐに表情を引き締めて、枕元のサイドボードを目で示した。少佐は立ち上がり、引き出しの一番上を開けた。紐でくくられファイルされたプリントの束と、それをコピーしたらしいファイルがふたつ出てきた。少佐は専門家らしく見聞した……コピーされたファイルのうち、ひとつは本物だったが、もうひとつは偽物だった。表紙だけが本物で、あとはすべて適当な資料を印刷してきたものだった。

「こんなこつたろうと思ったよ」

少佐はからかうように云った。

「カーンの欠点はあるすぎるほどあるが、そのうちのひとつが用意周到でいようとしすぎるこつだ。これがまた、やたらと細を穿って考えるもんだから、ちつとも的を射たものにならんのさ。んなことしたって労力の無駄なだけなのに」

伯爵は微笑した。そうして、なおもその棚を目で指し示した。

少佐は伯爵を見返し、意味がわかったので、二段目の引き出し

を開けた。大きな茶封筒が入っていた。少佐はいやな予感を感じて、触れようとした手を一瞬引っこめ、もう一度伯爵を見た。伯爵はじつと少佐を見つめていた。バラを握った手に力が入り、ただでさえ白いのがいつそう白くなった。

少佐は決心して、封筒をつかんで手に取った。裏に蓋を閉めるための留め具と紐がついていて、その紐はいやに嚴重に幾度も交差して巻かれていた。こういうのが、カーンの神経質なところだ！ それをほどこきながら、少佐はできればこの中に入っているものを見たくないという訴えが、自分のうちから噴き出し全身を覆っていくのを感じていた。中身がなにかは知らなかった。しかし、本能的にその輪郭を感じ取り、知っていた。それが自分に非常に大きな打撃を加えることは、ほぼ間違いなかった。ところがそれは避けようのないもので、せいぜい衝撃の瞬間を遅らせることくらいしかできないのだ。奇妙な焦燥感が這い上がってきた。少佐はいやに複雑にふたつの留め具にからまった紐をほどこきながら、焦っていらいらし、ほとんど口から罵声が飛び出しそうになっていた。伯爵は黙って少佐の手元を見ていた。少佐はその伯爵の冷静さにもまたいらいらした。

ようやく紐がほどけた。面倒なことしやがって、カーンのやつぶち殺してやる。少佐は心の中で悪態をつき、封筒を開こうとして、急に慎重になった。どこか糊づけでもまかれていないかと探るように、蓋を指でなぞり、開いてもなおしばらく手を止

めてじつと考えこむような顔をした。それからようやく逆さにして中身を取り出した。数枚の写真とネガが転がり落ちてきた。心臓が凍りついた。血の気が引いていくのがわかった。写真は少佐の予想通り、伯爵に関するものだった。が、予想よりもやや露骨な、趣味の悪いものだった。それは明らかにことの最中を隠し撮りしたものだった。写真は長いあいだ頻繁に出し入れされ、眺められたに違いない。やや退色し、角は少し折れ曲がって、一面に指紋がべたべたとくっついていていた。

「……わたしは中を見てないんだ。その権利がないと思ってね」
伯爵は静かに云った。

「どちらもきみに預けるよ」

少佐の体内で、一瞬滞り、押しとどめられていた血流が解放され、ほとばしった。少佐は反射的に伯爵をにらみつけていた。

伯爵は平然とそれを受け止めた。そうして、あきらめたように微笑した。少佐はそれでさらにかちんときた。

「中身は見えないと云ったな」

押し殺したような声で少佐は云った。

「教えてやろうか？」

伯爵はなにも云わなかった。ただじつと、少佐を見返していた。いまやその大きな目には、幾分かの哀れみに似たものが混じっているように感じられた。これが少佐に最後の、決定的な一撃を食らわした。一瞬間、全身が燃え上がるような気がした。

のを最後に、なにかのスイッチを押されたように、少佐の頭から怒りがすっと消えていった。怒りだけでなく、ほかのあらゆる感情も、深みに吸いこまれるように消え去っていった。

彼はドアの方へ向かって足を踏み出した。

「どこへ行くの？」

伯爵が云った。鋭い声ではあったが、あわてたようすはなかった。少佐はゆつくりと振り返った。

「カーンのとこだ。BND本部。おまえが入れたなら、おれにも入れるはずだ……もつとも、おれの場合はおまえのような腕も、セキュリティ破りに特化した部下も持たないが、大丈夫だろう。顔で入れてもらえるはずだ。あのビルの受付嬢は、うちの受付嬢には及ばんが、なかなか愛想のいい美人だ」

伯爵はベッドの上で身を起こした。

「知っているよ。金髪碧眼の若き美女だ。きみの好みそうな子だった。わたしは昨日、彼女の代わりを務めていたからね」

少佐は表情のない目で伯爵を見下ろした。

「ほー、そうなのか？ それで、このくそいまましいブツをどうやって取り返した？ 知つとるかね？ カーンのやつも、金髪美女には目がないんだ」

伯爵は表情を変えなかった。

「それは知らなかったな。次からは考慮させてもらうよ」

「ああ、ぜひそうしてくれ。それに、具合のいいことに写真は

おまえのもんだったんだ」

伯爵はじつと少佐を見つめたまま、眉ひとつ動かさなかった。「そうだと思つたよ。きみの反応でね。そういうものを持つていて、かつ、金額次第で売りそうな男なら、まだひとりふたりいるかもしれないな……たいがい回収したと思つたけれどね」いまやふたりは、ほとんど憎しみを抱えた人間どうしがにらみあつてゐるようなありさまだつた。鋭利な、重苦しい沈黙が、しばしあたりを支配した。

先に反応を示したのは少佐だつた。

「……面白いかな？」

彼は鼻を鳴らして笑つた。

「おれがおまえのことδειいちいちてんでこまいしとるのが面白いかね？　面白いだろうな。おれだつてそう思うことがある。ずいぶん滑稽なもんだろうなど。誰も、好き好んでばかりにはなりたくない。そう見られたくもない。でもそうなつちまう。おれの上でやたらめつたらな銃撃戦が起きて、戦車が三百台も通り過ぎて、戦闘機が右から左から攻撃してきて、更地になつちまつたみたいな気分だ。更地だと云つとるのに、その上をさらに連隊が行進していくんだ。おまえにわかるか？　むちゃくちゃだ。こんな戦場があるか。おれはたいがいのことにはや耐えられるが、こんなやつは……おかげであのカーンのくそばか野郎は、嬉しそうに掘り出し物を拾つてきておれをおちよくりする

し、散々だ、ちくしょう。散々だ。おまえつてやつは、おれを……おれを……」

少佐は肩で息をしていた。自分がいったいなにを云おうとしているのか、あまりにも激しく、混沌としたものが次から次にこみあげてきて、もはやよくわからなかつた。少佐は愛情と憎悪と無秩序の極みに、自分が投げ出されてゐると思つた。ポロ布のような自分が、右から左からあおられて、虚空でみじめにくるくる回つてゐる。情けなく、滑稽に。

伯爵は相変わらず表情を変えなかつた。その顔は、氷のようになめらかで、冷たく見えた。

「……だけど、それでわたしにどうしろというの？」

伯爵は静かに云つた。

「わたしに謝れとでも？　わたしがきみの前にあらわれて、きみにちよつかい出して、うかつにも本気にさせてすまなかつたと云えばいいの？　あるいは、うかつにも本気になつたきみにさらにうかつにもわたしまで本気になつて悪かつたと云えばすむとでも？　全部わたしの責任だと云いたい？　きみだけが苦しんでゐると思つてるの？　わたしだっていやなんだよ、いつもいつも疑われて、きみは疑うたびに結局は自分を恥じて。そうして、きみはわたしに背を向けるんだ。背を向けて、扉を閉めてしまふ。わたしはきみを知りたいのに、理解しあいたいの、きみに触れたいのに、そしてわたしに触れてほしいのに、

この二年のほとんどのあいだ、わたしが見ていたのはきみの背中と、開かないドアだけ。わたしがどんなに寂しかったかわかる？ わたしって、そんなに信用できないのかな！ きみがなにに苦しんでるのかわからないほど、わたしバカじゃないつもりだけど！ わたしが同じものに苦しんだことがないなんて、きみは本気で思ってるの？ ここんとこずつと、この自問自答のくり返したよ。わたしはきみの苦しみに、一番痛いところに、触れるに値しない存在なんだろうか？ わたしたち、このまま愛し合えないまま終わるんだろうか、って。そして、その可能性を考えると、わたしはもう怖くなって、動けなくなってしまうんだ……」

伯爵はひと息に云うと、両手で髪をかきあげ、それから膝を抱えて震えだした。いつの間にか伯爵の手からこぼれ落ちていたバラの花が、床に落ちた。その拍子に花びらが何枚か取れて、その周りに散らばった。少佐はそれを、ひどく冷静に見ていた。「……………わたしたち、これつきり先へ行けないの？」

伯爵がか細い声で云った。彼はベッドの上で、自分の身体を抱きしめてうつむき、震えていた。

少佐は呆けたように、ふらふらと椅子の前に戻ってきた。視線は虚空をとらえたまま、手探りで椅子をさぐりあて、そしてよるめくようにして座りこんだ。それから煙草を取り出して、口にくわえて火をつけた。紫煙が細く長く立ちのぼった。しば

らくしてから、少佐はまた別の煙草を引っこ抜いて、くわえようとし、最初の一本がまだ健在だったのに気がついて、そいつをのろのろと投げ捨てた。それから新しいのをくわえて、火をつけた。

少佐は頭を抱えた。目の前がぐるぐると回っているようだった。気分が悪かった。なにかが自分のうちで、形にならない訴えを起こしていた。少佐はめまいがし、背中を丸め太股に両肘を乗せて目を閉じた。

形にならない新たな訴えは、はるか遠くにいて、必死で助けを呼んでいた。そこは戦場だった。火薬と、血の匂いのある戦場だった。砲弾が雨あられと飛び交う、激烈な戦いのさなかだった。それは身をかがいながら、進む先をなんとか手探りで確かめようとするのだが、すぐに四方から銃弾が飛んできて、行く手を阻まれる。少佐は黙っていられなかった。思わず飛び出していった。なんとかそのもとへたどりつき、引き寄せ、腕の中へおさめると……それが振り返って少佐を見た。

それは少佐自身、幼いころのクラウス少年だった。彼は少佐を見ると、まるで父親でも捜し当てたかのように、安堵の笑みをもらした。安心して大きな腕の中におさまり、息を吐いて、少佐に体重を預けて目を閉じた。少佐が困惑しながらもほっとした次の瞬間、腕の中のクラウス少年がぼうつと光りだした。そしてしだいにまぶしくなり、目もくらむほどの黄金に輝きだ

した。少佐は思わず自分の腕で目を覆い、顔を背けた……しばらくして、おそるおそる目を開けると、少佐の目の前に立っていたのは、あの黄金の、美しい女神ヴィクトリアだった。女神は少佐に向かって、幼いころの夢と同じに、優しく微笑み、うなずいた。

「……………少佐はゆっくりと目を開き、頭を抱えていた腕をおろして、顔を上げた。それから伯爵を見やった。彼はまだ震えて丸くなっていた。小刻みに震える彼の、痛々しい様子を見て、少佐はようやく我に返った気がした。」

彼は椅子に座りなおした。ため息をつき、丸めた手の親指で、額を掻き、煙草を取り出し、火をつけた。ゆっくりとひと息吐き出し、さらに吸った。それから少佐は、椅子から立ち上がり、伯爵の横にひざまずいた。伯爵は震えて泣いていた。

「……悪かった」

少佐は云った。

「許してくれ」

それは静かな、小さな声で放たれた。薄暗い、ひっそりした聖堂の中で、心から捧げられる祈りの響きに似ていた。伯爵の身体がびくりと動き、彼はゆっくりと顔を上げた。青白い、涙の筋の浮かぶ顔にかすかなとまどいと、疑いの表情が浮かんだ。彼はすぐにうつむいた。まつ毛がせわしなくはためいた。

「ドリアン、」

少佐は伯爵を呼んだ。名前を呼び、その名前が示すものを呼んだ。伯爵の身体が震えた。少佐は彼に手を伸ばした。その手も震えていた。震える身体と、震える手が触れ合った。少佐は伯爵を抱きしめた。柔らかな巻き毛が頬に触れた。

「許してくれ」

少佐は目を閉じた。伯爵の身体がひととき大きく震え、小さな嗚咽が聞こえてきた。

「悪かった……」

少佐は云った。かなり長いこと、ふたりはそのままじつとしていた。小刻みな震えはやがて静かに引いていった。少佐は顔を上げた。伯爵も顔を上げた。伯爵のせつかくの美しい顔は、涙でぐしょぐしょに濡れていた。少佐は胸が痛む思いがした。なぜこうなるのだろうか？ それだけはするまいと思っている相手に限って、こんなふうにしてしまうのはいいまいかな？ しかし少佐はもうその答えを知っていた。少佐は涙で濡れた、幾分不安げな伯爵の顔に向かって微笑した。

伯爵が腕を回してきた。少佐は痛いくらい抱きしめられるのを感じた。少佐は抱きしめ返した。優しく背中をなで、落ちつかせるように、頭をほんぽんと叩いた。それから立ち上がって、ベッドに腰を下ろした。伯爵の顔を両手でつつみこむようにして、親指で涙を拭い、それから額に自分の額をこつんとぶつけた。

「おまえの勝ちだ。おまえはおれを征服した。隅から隅まで。戦争は終わった。というわけでおれは武装解除する。そうするとどうなるかは知らんが。まだ試したことがないんでね」

伯爵が息を漏らして笑った。

「わたしが勝ったの？ きみじゃなくて？」

「わからんよ。だいたい、こういう場合勝ち負けってなんだ？」

「わたしだって知らないよ、きみが持ちだしたんだよ……」

「あー、わかった、悪かった、いつもそうしちまうんだ。勝ち負けとか、白黒とか」

ふたりは笑い出した。伯爵がおどけて、少佐の耳を引っばった。少佐は耳をぴくぴく動かした。

「武器を捨てた気分はどう、エーベルバッハ少佐」

少佐は笑った。そして伯爵の額にキスした。

「まだわからん。見晴らしはいいようだがね」

伯爵も笑った。そうして抱きついてきて、甘えるように頬をすり寄せてきた。ふたりは抱きしめあった。

もう十分だった。なにもかもが過ぎ去っていた。抵抗や不安や怯え、疑い、失うことをおそれ、さらけ出すことをおそれていた、ぎしぎしと軋むような耐えがたい時間は、もう終わったのだ。あの和解とともにやってくる温かい、不思議な感慨が、ふたりを包みこんでいた。誰しもの内側に眠っている影と秘密とは、いまはつつましく身を引いていた。否、それがあること

はもはや秘密でもなんでもなかった。あることにはあったが、そのこと自体はもう問題ではなかった。

「わたし、やつときみに触れた」

伯爵がうつとりと云った。

「きみはやつと、わたしを受け入れてくれた。わたしに、触れることを許してくれたんだ……」

その陶然とした声を耳元で聴きながら、少佐も柄になく似たような気分であることを認めた。

「ドアを叩いていたのはわたし。油断すると、きみが背を向けてしまうから。すぐに、離れていってしまうから。わたしには、誰よりもきみが必要だったのに。すごく寂しかったんだよ。でも、ようやく終わったんだ」

ふたりは沈黙し、見つめあい、抱きしめ合った。もうなにもする必要がなかった。少佐は目を閉じ、自分が溶けだしていくような感覚を味わった。うるわしい勝利の中に。自分が敗れ、そして勝ち取ったものの中に。

どんづまりまできていたわけではなかったのだ、と少佐は知った。まだ、はじまりのところにはすらいなかったのだ。いま、少佐は、はじまりであり、終わりであるところの場所に立って、伯爵を抱きしめていた。羞恥も痛みも、いまは消えていた。彼らはなにか、お互いの存在を超えたところで交じり合っているように感じられた。そしてそれでも別々の人間で、別々の人生

を歩いていて、お互いにつまびらかでない過去をしょっているのだ！ 不思議だった。あまりにも不思議で、わけがわからなかった。ふたりがふたつであり、ひとつであるとは、なんとわけがわからないことなのだろう！ お互いがお互いに、自分をすっかり開示し、明け渡すことは、なんとおかしな状態を作り出すものか。少佐は自分が完全に伯爵のものであり、伯爵が完全に自分のものであるのを、ふたつの領域がすっかり重なりあい、わがちがたく、もつれあつてどこまでも駆けていくのを、感じ、見送っていた。劇的な、神がかった、神秘的な瞬間。ふたつの心があることの秘密、秘密があり、秘密がないことの秘密、愛しあうことの秘密。すべてのことが、だしぬけに少佐の前に開かれ、明らかになったのだ。

「……簡単なことじゃないか」

少佐は云った。

「実に簡単な。おれはいままで、なにをしとつたんだろ、うかね」

「戦っていたんだよ」

伯爵がいたわりをこめて云った。

「更地になるまで戦い尽くさないと、わからないこともある。武器の捨て方、身の守り方。それから、愛し方と、愛され方。武器を捨てて、服を脱ぐのは楽じゃない。誰かの前に、裸で現れるのは。すごく難しいよ。いつも終わってみれば、拍子抜けするようなことなんだけれど」

「おまえ、ほかの男ともこういう経験をしたのかね」

少佐はふと気がついて訊ねた。伯爵が微笑んだ。

「うまくいったことはあんまり多くない。でもきみとはうまくいった。うれしいよ。傷だらけになった甲斐があった」

ふたりは見つめあい、目を閉じ、口づけた。

少佐の頭の中で、四頭馬車の女神は天を駆け、黄金の女神が力強く空へ羽ばたいていった。

よくあることだが、彼らは自分たちのことにかまけていろいろなことを忘れていたことに、しばらくたってから気がついた。

すでに午後になっていた。厳密に云えば少佐はもつと前から気がついていたのだが、自分の腕の中ですわんとしている伯爵の前に、仕事が義務がどうのと云いだすのは、まったく並大抵のことではなかった。そんなことは、たとえエーベルバッハ少佐でもできなかった。それで、伯爵の気が済むと、彼はまずくそいまいましい写真とネガに火をつけて、徹底的に燃やした。それから大慌てで部長に電話をし、資料が手元に戻ってきたことを伝えた。

「めでたいことだが、しかしそりゃあ……いったいどうしてそんな神業ができたのかね？」

部長は心底不思議そうな声で云った。少佐は一瞬ことばに止まった。その隙に、伯爵が受話器を奪いとった。彼はベッドの上で勢いよく行動に出たので、シーツやかけ布団ががさがさいう音が受話器の向こうにも届いたに違いなかった。

「ハロー、部長！ わたしですよ！ 誰だかおわかりですか？ あはっ、それはどうもありがと。わたしは毎日輝いてますよ！

そうなんです、わたしとつても暇だったんです。つまりこれは、純然たる暇つぶしなんです。いい頭と身体の体操になりましたよ、おかげさまで！ 今後もご用命がありましたらお気軽にどうぞ！ 請け負うかどうかはわかりませんけど」

チンと音を立てて受話器を下ろした伯爵を、少佐は冷たく見つめた。

「前から思ってたんだけど、部長とかきみの部下諸君は、いたいわたしたちのこと知っているのかな？ それともぜんぜん知らないの？」

伯爵は少佐の首に腕を回してぶら下がり、少佐の鼻先に自分の鼻先をこすりつけてきた。

「知つとるのか知らんのか知らん。少なくとも部長には、いまだで確信させた可能性もあるが」

少佐はまだ冷たい顔をしたままで云った。

「態度にも出さないの？」

伯爵が音を立ててキスしてきた。彼は実に都合よくひとの話を無視することができるのだ。

「出さんよ。んなことしてみろ、たとえば部長だろうとアラスカへぶつ飛ばしてやる。いいか、おれはやるぞ」

「ああ、なんと恐ろしいこと！ ご主人さま、情けをお忘れになりますな！ どうかお慈悲を！ お慈悲を！」

伯爵がのけぞって暴れるので、少佐は伯爵をぶら下げたまま

立ち上がり、部屋をぐるぐる回った。それからふたりはソファにどすんと腰を下ろした。それから笑った。

「ご主人さま、わたくしの考えを云つてもよろしいでしょうか？」

少佐の上に横向きに乗った伯爵が云った。彼はまだ少佐の首に腕を回していた。

「云うがよい」

主人は許可した。

「ありがたき幸せ。わたくしめの考えでは、ご主人さま、この世に長く保たれる秘密というものはございません。墓場まで持つていくことのできる秘密などないのでございます。どのみち、神の前にはすべて明らかです。神はすべてをご覧になり、記録天使が勤勉に仕事をしているというのに、われわれ人間というもの、おのが小さな胸に後ろ暗い秘密をたくわえることはかりでございます。ですが、ご主人さま、一方で、秘密とは尊いものでございます。それを不当に侵害する権利は誰にもないのでございます！ 万が一にもそうしたことがございましたらば、もちろんご主人さまは激怒なさり、誰であろうと毅然として罰をくわえる権利がおありに……」

「アラスカ送りの……」

「おそろしい罰を……」

この出演者二名、観客ゼロの芝居はそこで、惜しくも電話の

ベルによつて中断された。部長からだった。

「すまん、少佐、資料はきみが持ち帰ることになるのかどうか、聞くのを忘れたもんだから。ところでこの番号は、きみの部屋のものじゃないようだが、折り返してもよかつたのかね？」

「折り返しといふ云わんでください。そういうのをスケベ根性と云うんだ」

伯爵が大声で笑った。少佐は受話器をおろして、罰をくわえてやる、と云いながら電話線を引っこ抜いた。

「アラスカ送りだ！ 電話ごと！」

伯爵は叫んで、万歳し、また笑った。

それからふたりはおとなりをノックして、エステン氏に資料を返した。エステン氏はびっくりして、丸眼鏡を上げようとしてずり下げてしまった。

「ドリアン、きみときたら、いけない子だよ、まったく」

話を聞いたエステン氏は思わず、八歳か十歳ぐらいのドリアン坊やに云うように、そう云った。ドリアン坊やはべろりと舌を出し、しかられるのが怖いので急いでドアの陰に隠れた。

「これは、あなたに差し上げましょう、エーベルバツハ少佐」

エステン氏は資料を少佐の手に押し戻して、気前よくそう云った。

「気の済むようになさるといい。わたしの休暇もそろそろおしまいだし、残りの期間を、なんら気に病むことなしに楽しく過ごしたいですからな」

伯爵が大急ぎでドアの陰から出てきて、エステン氏に抱きつき、キスと感謝の嵐を浴びせた。エステン氏はやや迷惑そうな、しかしまんざらでもなさそうな苦笑いを浮かべていた。

三人はそれから、ホテルのレストランへ出向いて食事をした。ドリアン坊やがとても腹ぺこでいけなさと云い出したからだ。

「安心したらお腹がすいちゃった」

というのが伯爵の云いぶんで、そして少佐はそれをもっともだと思った。この数日というものの、少佐は食事をしていたというより、食物を腹につめこんでいた。伯爵もおそらく似たようなものだったに違いない。そうしていざレストランへ行こうとなったとき、今度はドリアン坊やは着替えをすると云って、部屋に駆けこんでいき、三十分も出てこなかった。少佐とエステン氏は礼儀正しく、辛抱強く十分は待った。が、そのあとは辛抱するのをやめて、エステン氏の部屋に入り、静かに祝杯をあげた。もつとも、ことにエステン氏にとって、それを祝杯と呼んでいいものかどうかは微妙なところだった。だが、一種の祝杯には違いなかった。

「わたしは少なくとも自分の一部が、幾分晴れやかになったのを感じますよ」

とエステン氏は云ったからである。

伯爵がようやく着替えを終えてやってきた。彼は目の覚めるような美しい青いブラウスに、バラの花とつたをモチーフとした、ダイヤモンドをたっぷり散りばめたネックレストと、そろいのイヤリングをしていた。金髪をきらめかせた伯爵はまばゆいばかりに美しかった。エステン氏は伯爵を見て思わず目をしばたき、それからゆっくりと微笑した。少佐は眉をつり上げた。伯爵が少佐とエステン氏のあいだに入って、ふたりの肘に腕をかけた。

三人は仲良く連れ立ってぶらぶらレストランに降りていった。伯爵はすっかりいつもの伯爵に戻っていて、とどまるところを知らないおしゃべりで食事の席を盛り上げた。エステン氏はこのころしながら伯爵の話に相づちを打ち、ゆっくり食事を楽しんだ。覚えの悪い給仕が、またもや伯爵のグラスに二度めの赤ワインを注ぐとしたとき、少佐は今度は堂々と彼を追っばらった。伯爵はうれしそうに肩をすくめ、小さく笑っていた。

老人とふたりの男は、それからまたも連れだって動物公園へ散策に出かけた。

「われわれの代わり映えのなさときたら、一級品だと思いませんか？」

伯爵はエステン氏に云った。

「ベルリンはとても広いのに、わたしたち、ここに滞在するあいだ、グランドホテルと、動物公園と、その周辺の施設にいくつか顔を出しただけ。ホテルの外のレストランへも行っただけど、たいがいホテルですませましたね？」

「年をとると、人間、環境の急激な変化を望まないようになるからねえ。年寄りには、静かな完結した秩序を愛するんだよ。実はわたしはベルリンへ遊びに出てきたその日から、ずっと故郷バウツェンをなつかしく思い続けてきたんだ」

伯爵は一瞬間食らったような顔をして、それから声を上げて笑った。

エステン氏はまたも戦勝記念塔へ向かう途中で散歩を断念し、雲を観察する趣味に時間をとることにした。少佐と伯爵は彼よりうんと若かったので、先を続けた。

ふたりは裸の木々のあいだをのんびりと歩いていった。伯爵は上品なページュのカシミヤのコートに身を包み、気持ちよさそうに金髪を揺らして歩いていた。顔には絶えず微笑が浮かんでおり、ときおり青い目が優しく少佐に向けられた。少佐は数日前に、暗い毛皮のコートに身を包んだ伯爵とふたりでこのあたりを歩いたときのことを思い出していた。ふたりの物理的な距離は、そのときもいまと変わりなかった。彼らはいまと同じように寄り添って歩いていた。が、いまとはまったく違ってい

た。少佐はいまは、伯爵の身体を確かに感じられた。それが自分の横にあることを、疑いなく、非常な充足と実感を持って感じられた。その実感は絶えず彼をくすぐって、心地よい満足を誘った。

少佐は満足して煙草を取り出した。口にくわえ、箱をしまつて、火をつけようとしてまたもライターがないのに気がついた。はっとすると同時に、すつと横から伯爵の手が伸びてきて、少佐の煙草に火をつけた。

「……泥棒」

少佐はにやつきを隠さずに云った。伯爵は実に美しく微笑した。妖しい微笑を浮かべたまま、伯爵は火がついたばかりの煙草を少佐の口から抜き取り、情感たつぷりに音を立ててキスして、煙草を元へ戻した。そうしてまた微笑した。ライターはまだ伯爵の手袋に覆われた手のひらの中にあり、彼はそれを手の中でもてあそんでいた。そうして急に身体の向きを変え、振り返って少佐にからかうような視線を投げてから、逃げ出した。少佐は一瞬あつけにとられ、それからにやついて、追いかけるじめた。

伯爵が本気で逃げ出したなら、誰にも捕まえることなどできはしない。彼は豹のごとき脚を持っているからだ。だがこの場合、伯爵はまったく本気でなかった。彼は慎重に少佐との距離を計算していた。少佐が大腿で近寄れば、急に走り去って距離

を広げ、少佐の焦燥感を煽ってみたり、少佐があきらめてのんびり歩いて後を追えば、伯爵の歩みもまるで散策を楽しむようにゆつたりしたものになった。伯爵は木の陰に入つて、くるくると幹の周りを回つてまた出てきたり、脇の小道へそれたり、少佐の手が届きそうな距離まで近寄つてきて、また離れていたりした。少佐はこの遊びを大いに楽しんだ。あるときは伯爵の誘いに乗つて本気で走つて追いかけたり、また別のときには伯爵の手には乗らずに、関心がなさそうにことさらゆつくり歩いたりもした。唯一の欠点は、ライターがないので次の煙草が吸えないことだった。少佐の煙草はとづくに終わつていた。ふたりは不思議な追いかけつことを続け、ときにもつれあうように、転がりあうようにひとつのかたまりのようになつたり、ふいに離れたりしながら、ついに戦勝記念塔までやつてきた。

伯爵は塔の入り口前で、首をかしげてかわいく立つていた。

少佐は伯爵の少し前で立ち止まつて、塔のてっぺんできらめく黄金の勝利の女神を、まぶしげに見やつた。女神は相変わらず堂々としていた。それから少佐は伯爵を見やつた。伯爵は首を反対にかたむけて、微笑した。それから急に身を翻して、塔の中へ入つていった。少佐もあとを追つた。

伯爵が料金を払わずに行つてしまつたものだから、少佐は受付でふたりぶんの料金を払うのに多少の時間をとられた。旅行者どもの落書きに汚染された薄汚い壁の先に、展望台へ出るた

めの螺旋階段がある。伯爵は緑がかつた手すりに手をかけ、少佐がついてきていることを確かめるように振り返つて、軽々と階段を上つていった。少佐は追いかけた。ふたりはぐるぐると上へ連なる階段を上り続けた。上から見たならば、くるくると回りながら上つてゆく伯爵の金髪はさぞ美しいだろうと少佐は思った。ふたりは緩慢な動きの駒のように回つていた。上と下で、ミツバチの旋回のように、じゃれあう子猫たちのように、くるくると回つていた。

展望台に着いた。少佐が外へ出ると、伯爵が正面のフェンスに背中を預けて、微笑を浮かべて待ち受けていた。彼は太陽を背負つていた。彼らの金髪が、冬の午後の落ちついた日差しを浴びてきらめき、さんざめいて、少佐を誘つた。そのきらめきは、塔のてっぺんに荘厳な様子で立ち続ける女神よりもはるかに美しく、優しく、人間らしく、少佐に訴えかけていた。勝利の女神は微笑んでいた。少佐の勝利の女神、栄光の女神は……男達が……少佐に万感の思いをこめて微笑んでいた。少佐は刹那、圧倒された。その栄光、気高き、誇り、真摯さ、けなげさ、いろいろなものが、少佐の脳裏をよぎつた。女神が意味ありげにまばたきした。少佐は吸い寄せられるように、近づいていった。

彼の青い目が少佐を見つめていた。少佐の灰色がかつた緑の目はそれをじつと見返した。伯爵が小さく微笑み、少佐にライターを差し出してきた。少佐はそれを受け取り、ポケットへし

まい、それからふと思ひ出して、あのすずらんのブローチを、クレイグの足元から拾つてきたあのブローチを、ポケットから取り出し、ライターの代わりでもあるかのように、伯爵に手渡した。伯爵はうれしそうに顔を輝かせ、ブローチを受け取つて、うつとりと首を傾けた。

少佐はしばらく伯爵の顔を見つめて待った。伯爵がブローチをしまい、十分なほど時間がたつてから、少佐は彼の両肩をつかみ、その大気に溶け出すような、けぶるような金髪に、おそろおそろ鼻先を触れさせた。それから額に、鼻筋に、鼻先に、遠慮がちに唇で触れた。唇を離すと、目があつた。ふたりは抱き合つた。そうして、勝利の女神の輝く下で、長いことくちづけを交わしていた。